12
二葉
小国 535

国語の本

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

T1A7
1L0
2

10

五年下

60344
教科書文庫
6
810
74-1950
01304
49915

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449915

国語の本 十

第五学年 下

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

広島大学図書
0130449915

中央図書館

広島大学図書
0130449915

もくろく

一　楽しい運動
（一）私の運動日記……4
（二）運動会……14
二　平和と文化
（一）おじさんから……29
（二）幸福の国の青い鳥……36
三　ことばの愛
（一）ことばの愛……50
（二）文字の話……52
四　工夫の楽しみ
（一）こわれたポータブル……64
（二）スイスのとけい……79
五　冬の生活
（一）スキーの話……97
（二）雪のえい画……103
六　デンマークの二本の柱……112
学習の手引……145
新しく出たおもなことば……153
新しく出た漢字……159

一　楽しい運動

（一）私の運動日記

十月四日（水）晴

からりと晴れたよい天気だ。勉強が終ると、私たちはいつものように運動場へとび出した。もう、ほかの組の人たちも元気よく遊んでいる。

「何をしましょうか。」

「そうね、やっぱりおにごっこをしましょうよ。」

私たちの相談はすぐまとまる。おにごっこも、にげ方や追っかけ方を考えてすると、なかなかおもしろい。

にげる時は、みんなおたがいに守りあうようにかたまっていて、おにがやってきたらひとりひとりわかれて、おにの気をそらすように四方八方へ散って行く。おにがひとりを追っかけはじめると、また

みんなその近くへ集まり、おにの気持を自分の方へ引きつけておいては、ぱっとにげだす。

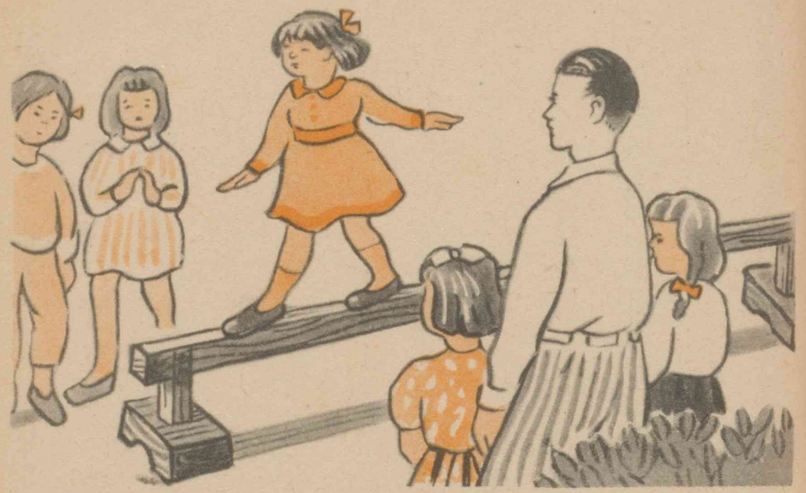
おにになった時は、みんなに気づかれないようにしていて、ひとりをねらったら、わき目もふらずひた向きに追っかけて行く。こんなふうに考えてやった。

きょうは、にげた時も、おにになった時も、自分の思いどおりになって、とてもゆ快だった。

十月五日（木）晴

きょうもよい天気である。

運動場へ出ると、ちょうど体そうを終った六年生たちが、平きん台をしまうところだった。



「それ、私たちにかしてください。あとでしまっておきますから。」

と、たのんでかしてもらった。

ほかの組の人たちの運動のじゃまにならないように、平きん台をこうどうの横へ運んで行って、みんなでわたり方を練習した。

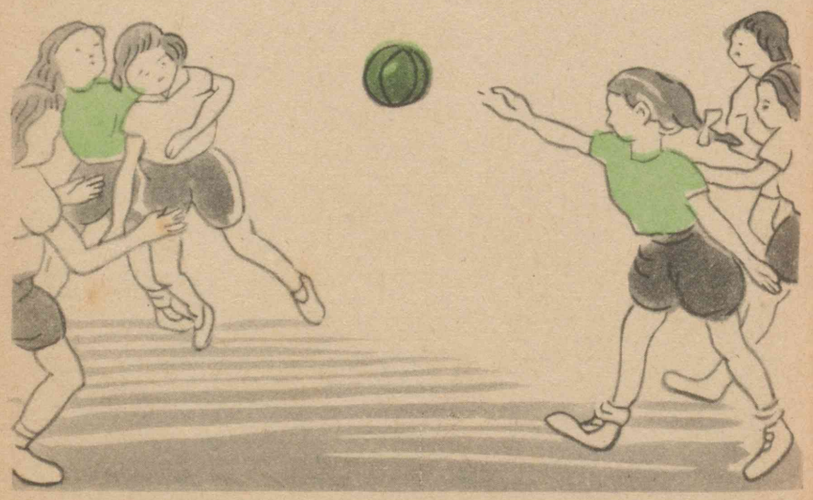
前向きにわたったり、横向きにわたったりした。なかなかうまくいかないで、何べんもとちゅうで落ちた。いつの間にか、先生もそばへきて見ていらっしゃったが、

「先生もなかまにはいって、やってみようか。」
とおっしゃった。先生はわたり方がとてもうまい。あとでわたり方を教えてくださった。みんないっしょうけんめい練習した。

十月六日（金）くもり後晴

朝のうち少しくもっていたが、午後からはきのうにまけないよい天気になった。午後は、私たちの組の体そうである。したくをして、みんな元気に運動場へ出た。
「きょうの運動は、ドッジボールにしてください。」
と、みんなで先生にお願いした。
「では、この前の続きをやりましょう。」
先生は、にこにこしながらおっしゃった。

この前は三回やって、私たちが二回負けている。きょうは、ぜひ勝ちたいものだ。
私は、最初内野になって、相手にどんどんあてていった。「やめ。」のあいずで人数を数えたら、私たちの方が七人も多くて大勝ちだった。
二回目も私は内野になったが、この時は相手方がはげしくあててきて、私たちの方が四人の差で負けた。私は一回



目と同じように、最後まで内野に残っていたのに残念だった。
いよいよ三回目になった。どうしても勝ちたい。今度は、外野にまわった。
外野は、私はあまり得意ではないので、少し不安だったが、きょうはうまく相手のひとりにボールをあてて、すぐ内野にはいった。それからはもうむちゅうだった。
「やめ。」のあいずがあった時、内野に残ったものは、相手方とほとんど同数ぐらいだった。人数を調べると、私たちの方が、八人で、相手方が七人だった。きわどいところで勝った。うれしくてたまらない。

十月七日（土）晴

勉強がすんだ。
鉄ぼうの方へかけて行く。
鉄ぼうにつかまって、
くるくるまわる。
ぐるっとまわって、さかさになって、
下から見ると、きれいなけしきだ。
上へあがって、せぼねをのばすと、
ぽっかりうかんだ白い雲へ、
ぴょんと、とびつけそうだ。

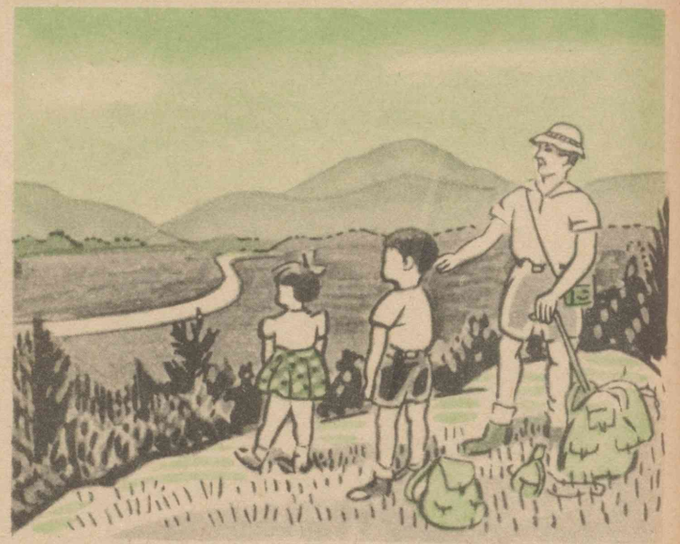
十月八日（日）晴

おとうさんと弟と三人で、たき山へのぼることになった。

朝早く起きた。あつらえむきの上天気だ。おかあさんのつくってくださったおべんとうやおやつをリュックにつめて、三人で元気よく出かけた。

一時間ばかり朝の道を歩いて、たき山のふもとについた。たき山は高さ六百メートル、このあたりで一番美しい山だ。しばらく休んでのぼりはじめた。少しのぼると、しだいに道がけわしくなってくる。足もとがあぶない。半分以上のぼった所で、とうとう弟が弱ってしまった。私も息切れがしてきた。三人、岩にこしをかけて休んだ。風がひやりとせなかに流れこむ。

大分長く休んでから、またのぼりはじめた。おとうさんは弟のリュックを持ってやっていらっしゃる。「よいしょ。よいしょ。」とかけ声をかけてのぼって行った。ようやくちょう上へついた。



とてもいいけしきだ。私たちの学校が、明かるい秋の日ざしをうけて小さく見える。川も細くおびのように流れている。ちょう上の見はらし台にこしかけて、おべんとうやおやつを食べた。

食事がすむと、急に元気をとりもどして、私は弟とつかれをわすれて遊んだ。

帰りはのぼる時とははんたいに、すべるように早くおりた。

家に帰りついたのは、午後三時過ぎだった。

（二）運動会

秋晴れのよい天気です。ちり一つない運動場に、白線がくっきりと浮かんで見えます。はちまきをした一年生が「きゃっ、きゃっ。」ととびはねています。見物席は、もう半分以上もつまっています。ことしの運動会は、五六年生が協力して、プログラムの相談をしたり、会場の準備をしたりしました。

運動場一ぱいに流れていたにぎやかなレコード音楽がぴたりと止まると、白シャツ白ズボンの高木先生が、本部のマイクロホンの前に立ちました。

「これから運動会をはじめます。みんな前の庭に集合してください。」

高木先生の元気な声が、二階のまどぎわのスピーカーからひびいてきました。みんな、わあっと歓声をあげて、前庭の方へかけ出しました。どの顔もどの顔も明かるく健康そうです。六年生のかかりの号令できちんとならびました。

行進のレコードに合わせて入場しました。何だかからだ中がむずむずしてきて、ひとりでに足が浮きたちます。

「きょうの運動会は、この晴れわたった秋空のようにすっきりした気持で、楽しく、元気いっぱいにがんばりましょう。」

校長先生のお話のあとは合同体そうです。それが終ってから、赤白に分かれてひかえ席にかえりました。

いよいよえんぎがはじまります。進行がかりがプログラムの順によび出します。おうえんの声が、しばらくはにぎやかに聞

こえています。道具がかりの子たちが、いそがしそうにかけて行きます。

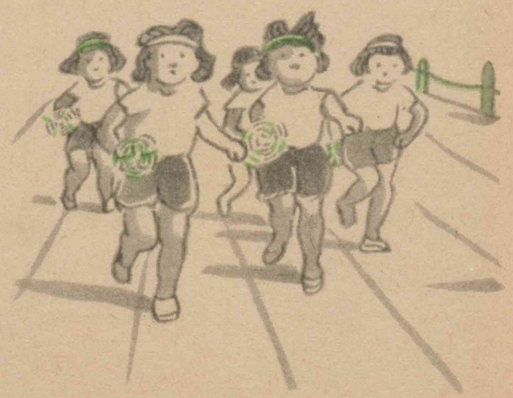
第一回は三年生の徒競走です。赤白に分かれて六列にならんだ三年生が、スタートラインの所へ向かいました。ひかえ席からは、一せいにはく手がおこりました。中山先生のピストルのあいずで、ひと組ずつかけ出します。赤白のぼうしが入りみだれて、運動場をまわります。歯をくいしばって走る子、両手をくるくるまわして走る子、ころげても元気にはね起きて走り続ける子。おうえんの声が走る子を追っかけてまわります。

第二回の二年生の「風車競走」は、

ただ風車を持って走るだけですが、赤・白・青・黄の風車が、すごい勢いでまわりながらぬいたりぬかれたりするのはおもしろいと思いました。

ゆ快な四年生の「大玉ころがし」おかしい三年生の「はとぽっぽ競走」がすんで、いよいよかわいい一年生の「玉入れ」です。見物人が一せいにはく手をおくりました。みんな手に手に玉をにぎって、にこにこと行進します。赤白に分かれて位置につきました。長いさおの先のかごが、青空に向かって大きな口をあけています。

「さあさあ、しっかり投げるんだよ。」



かごが一年生によびかけているようでした。

いよいよ玉入れがはじまりました。かごのふちに当って、おしいところで落ちる玉、底にぶつかって、はね返る玉、かごを乗りこえて、向こうへとぶ玉。まるで赤白の玉のふん水です。見事な花火のようです。あとからあとからふきあがります。ぱっぱっととび散り、はね返ります。

一年生は、もうむちゅうです。赤白の区別などわすれてしまったようです。手当り次第に投げています。

ピストルが鳴りました。両軍は、もとの位置に引きあげました。一点の差で赤が勝ちました。赤は得意そうにばんざいをさけびました。

こうして、えんぎはだんだんおもしろくなっていきました。

いつの間にか見物席はぎっしりつまって、後の方に立っている人さえありました。

午前の番組の最後は、四年生以上の女生徒のダンスでした。両手に赤と青のリボンをひらひらさせて、ちょうちょのようにおどりました。二重の円をつくっておどっている様子は、絵日がさのようにきれいでした。ここから見てもあんなにきれいなのだから、二階のまどから見おろしたら、きっとすばらしい

だろうと思いました。

昼食の時間になりました。みんな教室にはいって楽しくいただきました。給食の方からは、おいしい副食物がたくさん出ました。昼の休みには、ＰＴＡの売店がたいへんにぎわいました。

午後のプログラムは、えんぎをする方も見物をする方も、カこぶのはいるものがずらりとならんでいます。ひかえ席からのおうえんの声も急に興奮しはじめました。次ぎ次ぎと進んで、第二十五回の「たわら運び」の番がやってきました。五年生のえんぎです。進行がかりのよび出しを聞いてから、ぼうしをかぶりなおして前庭に集合しました。みんなは、足をもんだり、両手をふりまわしたりして、準備運動をはじめました。

「みんな、しっかりがんばろうね。」

「よしきた。きまりよく、元気にやろうよ、ね。」

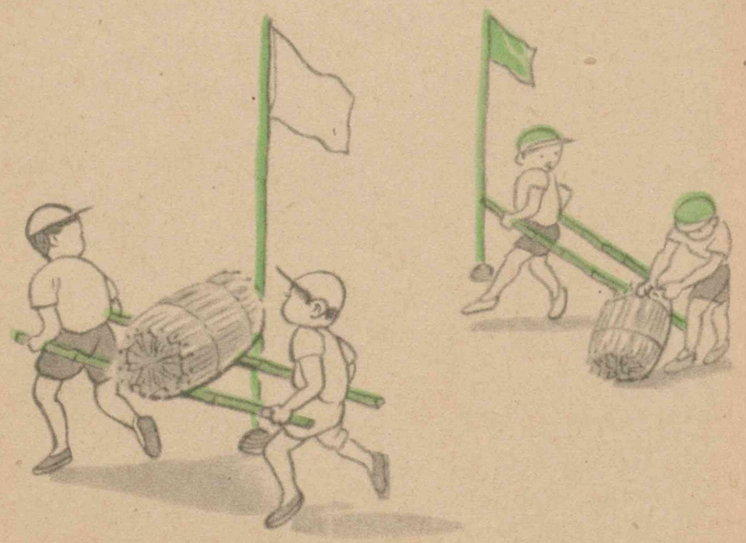
そんなことをいって、だがいにはげましあいました。

「赤勝て。」

「白勝て。」

と、かわるがわるよびあうおうえんの声の中を、かけ足で位置につきました。ピストルのあいずでかけ出しました。

まるまるとふくれあがったたわらを、二本の竹のぼうにの



せて走るのにはなかなかの苦心がいります。とんとんとかける足のしん動で、たわらの向きが竹のぼうと平行になったりします。すとんと落ちてころげまわるたわらを見ると、見物人はわあっと歓声をあげます。ぬいたりぬかれたりで勝負はなかなかつきません。見物人はそのたびに興奮して、赤よ白よのおうえんの声が、運動場にあふれるばかりです。

いよいよ私たちの番がきました。後ぼうの子は秋山君です。せいが小さいので心配です。白が少しおくれてつきました。

「たわらをしっかり見ていてね。」

早口に秋山君にいって、竹ぼうをにぎってさっとかけ出しました。おり返しの白旗をまわる時はほとんど同時でした。赤のたわらが落ちました。今のうちだ、と思ってぐっと足に力を入

れました。そのひょうしに、竹ぼうをにぎっている手が軽くなりました。三メートルほど走ってふりむくと、秋山君がたわらをかかえてまっかな顔をしています。白のひかえ席は総立ちのおうえんです。

この「たわら運び」は、ついに勝ち負けなしの熱戦ぶりでした。

第二十八回、PTAの「かりもの競走」がはじまります。スピーカーが父兄の見物席によびかけて有志をつのっています。この競走は、とちゅうにばらまいてある紙きれを拾って、そこに書いてあるものを見物席からかりて走るのです。スタートラインの所には、有志の人々が続々と集まってきました。先生がたもまじっています。

最初の組がかけ出しました。あまり勢よく走りすぎたので、

紙きれの置いてある所をとびこしてしまったおじさんがあります。みんな走りながら読んでいます。書いてあることがわかると、急にあたりをきょろきょろさがしはじめます。

「来年一年生にあがる女の子をかしてくださあい。」

野球ぼうをかぶったおじさんが、紙きれをひらひらさせながら見物席によびかけています。見物席から、どこかの

おかあさんが女の子を連れてかけ出しました。野球ぼうのおじさんは、

「すみません、お願いします。」

とさけんで、その女の子を大事そうにだきあげて走り出しました。にぎやかなはく手がおこりました。一年生を三人連れて走る先生、ハンドバックをうでにさげてかけるおじさん、かりる人もかす人も、みんなにこにこ顔です。PTAの「かりもの競走」は、おかしくて、おかしくて、わらい声がいつまでも止みませんでした。

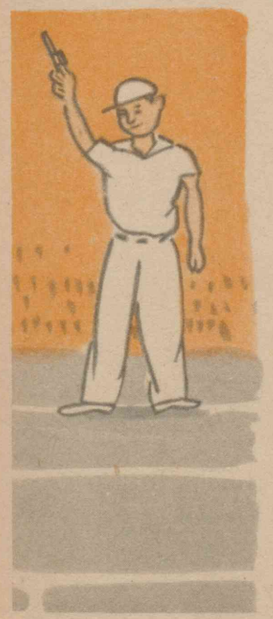
いよいよ最後の番組になりました。スピーカーから、全校こう白リレーの選手のよび出しが場内にひびきわたりました。その時とつぜん、赤のひかえ席の方からわあっという歓声があが

りました。するとそれにこたえるように、白のひかえ席からもあらしのような歓声がおこりました。

「フレー、フレー、赤。」

「フレー、フレー、白。」

場内は、完全に興奮のるつぼにとけてしまいました。その中を、二列にならんだ学年代表選手が、足どりも軽くスタートラインに向かっています。赤白のはちまきをきりっと結んでいます。やがて、用意のできたあいずのふえがひびきました。小さな一年生がスタートラインにつきました。中山先生のピストルが高くあがりました。

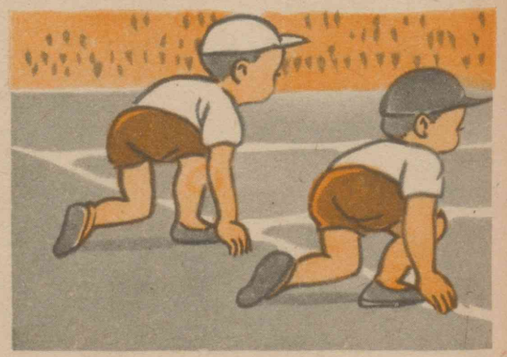


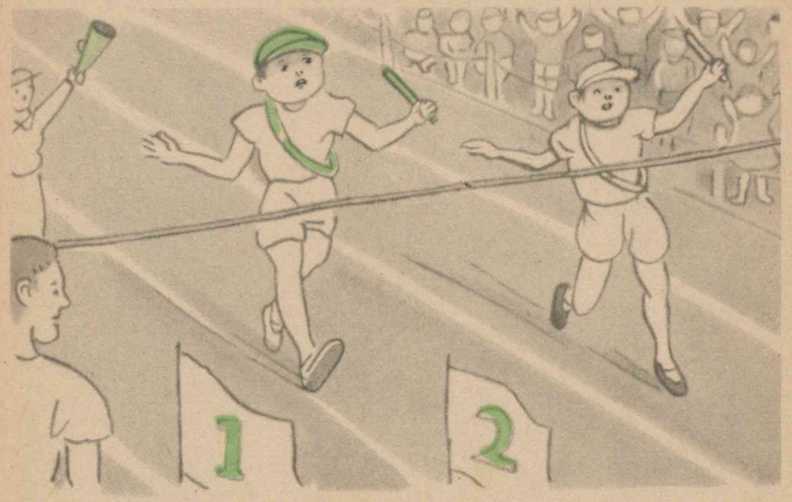
そのしゅん間、場内は水を打ったようにしいんとなりました。

ふたたびばく発した歓声の中を、一年生の選手がかけ出しました。ころがるようにかけて行きます。はじめのカーブで、先頭の白が何かにつまずいてころりところびました。白はすぐはね起きて、その赤を追います。歯をくいしばって、ぐんぐん追いつめます。みんな、ひかえ席から乗り出しそうになりました。

決勝点の少し手前で、とうとう赤を追いぬきました。バトンを二年生が受け取りました。

三年、四年、五年と、追いつ追われつの大接戦で、敵味方入





りみだれてのおうえんです。父兄席まで総立ちになりました。

パン、パーン。

ピストルの音と同時に、最後の選手がほとんどかたをならべてテープを切りました。われるようなはく手が、いつまでも場内にひびいていました。

楽しみに待っていた運動会も、とうとう終りました。すみきった秋空の下で、思いきりはねまわったあとの気持は、幸福そのものでした。

二　平和と文化

（一）　おじさんから

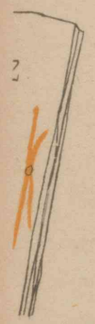
あきらさん。

一週間ほどまえから東京では気持のよい秋晴れの日が続きます。みなさんお元気だそうで安心しました。ことしも、おじいさんのごじまんのきくが、庭いっぱい美しくさいていることでしょう。私もおか

げさまでぴんぴんしています。

「家庭新聞」を送ってくださって、ありがとうございました。ほんとにすばらしいできばえです。ゆうべはおそくまで、あの新聞を読みました。そして、みなさんのことをなつかしく思いだしました。

ニュースは、新聞のまる写しではなくて、はっきりと要点をつかんでいます。わけても家庭ニュースのところは、ひとりひとりのようすをおもしろく書いてありますから、おかしくなって思わずふきだしました。ことに、研究らんにある君の「さつまいもの収かく」と、きよちゃんの「にわとり日記」は、よくできていました。気をつけて、くわしく観察したからだろうと思



います。その上、いろいろなところに数字がはっきり出ているのは、いかにも科学的で、りっぱなことだと思います。

「家庭のことば」は、新聞の社説にあたるところでしょうが、ふだんの生活をよく反省しています。きよちゃんのわらい話も、ひろしさんの絵も、おもしろくできていました。ほんとうになかよし家庭新聞ですね。なんべん読んでもあきません。

あきらさん。

あすは十一月三日、「文化の日」ですね。こちらでは今、いろいろな運動競ぎがあちこちのグランドで、はなばなしく行われています。また、このあいだから、講えん会や美術展らん会や

音楽会や図書祭などが、次々に開かれています。

昭和二十一年の十一月三日に公布された憲法は、君もひととおり調べていることでしょう。前文と十一章百十三条からできている新しい憲法は、古い憲法とはすっかりちがったものです。武器をすてて、えい久に戦争をしない平和な民主主義の国をけん設することになりました。文化をたかめて、世界の国々のためになることが、ただ一つの望みになりました。人類として、これ以上の望みはありません。そこで、十一月三日を、自由と平和を愛し文化をすすめる祝日にきめました。

しかし、平和と文化ということは、なかなかたやすいことではありません。いっしょうけんめいにならなければ、世界の国国に追いつくこともできません。ところが、昭和二十四年のち

ょうど文化の日に、遠いスエーデンのストックホルムからうれしい知らせがとどきました。それは何でしょう。そうです、君も知っているように、その前の年からアメリカ合しゅう国にいた湯川秀樹博士に、その年のノーベル物理学賞をさずけるという知らせがあったことですね。それは博士が昭和十年（一九三五年）に発表した湯川りゅうしという物理学の理論にたいしてでした。

世界でいちばん名よなノーベル賞は、半世紀も前からはじまっているのに、今まで日本でその賞を受けた人は、ひとりもあ

りませんでした。ノーベル賞は、物理学、化学、医学、文学、平和の五つの部門にわかれて授けられるのに、そのどの部門でも、日本は落第だったのです。世界の水じゅんからはるかに下のところにいたのです。それが時も時、ちょうど昭和二十四年の文化の日に、日本人の中から、この名よある人をだしたのです。湯川博士の研究がりっぱなものとして、世界の人々から折紙をつけられたわけです。国民はおどりあがって喜びました。そして心から湯川博士のてがらをほめました。

あきらさん。

文化は尊ばなければなりません。それは人間がほんとうの人間になるということです。そして、人類の進歩につくすということです。いくら尊んでも、尊びすぎるということはありませ

ん。人々が湯川博士をほめるのは、もっともなことです。

今までにこのノーベル賞を受けたのは男だけではありません。キューリー夫人や、パール・バック女史のことは、いろいろな本に出ていますから、きよちゃんにもすすめて、よく読んでください。

第二第三の湯川博士は、どうしても君たち少年の中から出なければなりません。毎年の文化の日に、日本の文化を、よく反省するようにしましょうね。

今は黄ぎく白ぎくがさきにおう秋です。おたがいに元気を出しましょうね。みなさんにくれぐれもよろしくいってください。

十一月二日

おじさんから

あきらさんへ

（二）　幸福の国の青い鳥

昭和二十三年九月三日の午後一時、わたしは、きょうの会場であるK講堂にでかけていきました。これは、ヘレン・ケラーさんの講演が行われるからです。電車に乗って、H停留場で下車して、それから二百メートルばかり歩いて行きました。もうすぐK講堂です。

わたしの前をピンク色のワンピースを着て、かみには、水色の大きなリボンをひらひらさせながら、どこかの少女が通っています。その右うでをしっかりとかかえたその父親らしい人が足を合わせるようにして、ゆっくりゆっくり歩いていました。幸福な父と子が、そろって散歩でもしているのであろうと思い

ながら、わたしはその横を通りこしました。通りすがりにその少女が、どんなようすをしているのかしらと、ちらっとふりかえって見たのです。

ところが、その少女は、まぶたをとじたままでいました。

「あ、めくらの子なんだな。」

と、わたしはすぐ気づきました。

「なんと気のどくなかたなのだろう。」

後すがたを見た時には、いかにも幸福そうに見えた人たちだけに、今、そのことを知って、いっそうかわいそうに思われました。「この人たちも、きょうのこのヘレン・ケラーさんの講演会にやってきたのかもしれない。」こ

んなことを思いながら、K講堂のげん関の石だんをのぼりかけました。

右手からのぼってきた人は、もうだいぶ年をとった男の人でしたが、まっ黒な目がねをかけ、つえをついていました。

講堂内は、ほとんど満員になっていました。わたしは、一ばん上の階上へのぼりました。ろうかをいききしている人たちも、ほとんどめくらの人で、妻に手を取られている夫のような人もいました。どちらも目が見えないふたりの青年が手をとりあって、早足に歩いているのもいました。

五六人の女の子、それも、やはりめくらの人たちでしたが、ひとりの女の先生に、みんなつながって入口にはいって行くところも見えました。

わたしは、すみの方にわずかあいていた席を見つけて、こしをおろしました。

きょうは朝から三十三度というきびしい残暑であったので、会場内はむせかえるほどでした。

定こくが少しおくれて、まくが左右に開かれました「ヘレン・ケラー先生をむかえる歌」を歌うめくらの学生たちが、ピアノをはさんできれいにならんでいました。

ピアノのばんそうにつれて、静かな美しい歌が満場にひびきわたりました。もちろん、この階上のかたすみにもよく聞こえま

した。耳も聞こえず目も見えない人をむかえるのに、歌を歌うということは、むだなことかもしれません。ヘレン・ケラーさんには感じることのできない世界であるからです。けれども、心からおむかえする喜びを、表わさないではいられないめくらの学生たちの気持を、わたしは尊く思いました。聞こえなくてつまらないだろうと思うのは、わたしたちばかりで、ヘレン・ケラーさんは、あるいは、何か感じるのかもしれません。空気のびみょうなしん動に、こころよい音色を聞くかもわかりません。聞こえる、聞こえないの境をこえて、みんなでその人をむかえることは、なんとしてもうれしいことです。

わたしは、今から十一年前にも、やはり

ヘレン・ケラーさんをおむかえしたことがありましたが、その時は、こんな歓げいの歌などには気がつきませんでした。あれからきょうまで、ヘレン・ケラーさんは、ただただ世の中の不幸な人たち——めくらの人や、おしの人、つんぼの人などをはげまし、元気づけて、少しでも幸福にしようという運動をしてきたのです。

その間に世界では大きな戦争があって、日本は、たいへんな変わりかたをしてしまいました。ただ一つの道、それは、真理への道を、一歩一歩と、しかも堂々と進んできたただひとりの人ヘレン・ケラーさんに対して、なんとはずかしいことではあり

ませんか。目のあいた者、耳の聞こえる者、よくしゃべれる者が集まっていながら、この十年間に、どれだけ、人間としての美しい実を結んだことでしょうか。

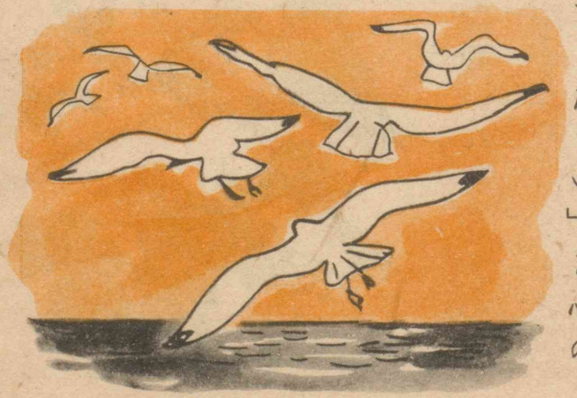
わたしは、ヘレン・ケラーさんをむかえる歌を、今はじめて知ったので、いっしょに歌うことはできませんでした。けれども、耳をすまして、その歌詞を聞きました。

幸福の国の　青い鳥、
青い小鳥が　飛んできた。
遠い国から　はるばると、
日本の国へ、この里に、
海をわたって　飛んできた。
ヘレン・ケラーのおばさまは、

いつも小鳥と　いっしょです。

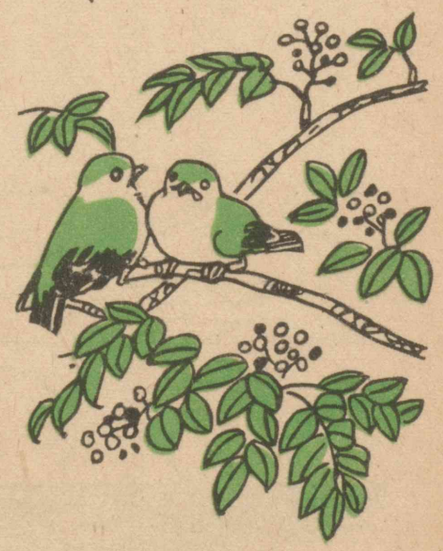
「なんといい歌であろう。そのとおりだ、そのとおりだ。もう人の学生さんたち、もっと大きな声で歌ってください。」と心の中で、わたしはさけびました。

幸福の国の　青い鳥、
青い小鳥を　みつけましょう。
みんなそろって　まどあけて、
心の中に、青空に、
かわいいつばさを　みつけましょう。
ヘレン・ケラーのおばさまの、
かたへ小鳥が　とまります。



幸福の国の　青い鳥、
青い小鳥が　歌います。
つらいなみだを　ふりすてて、
明かるく強く　ほがらかに、
生きていこうと　歌います。

ヘレン・ケラーの　おばさまは、
きょうもみんなを　守ります。
目の見えない不幸な人が、いっしょうけんめいに歌っているのを聞いているうちに、わたしはむねが一ぱいになりました。歌いながらあの人たちは、どんなになぐさめられているのだろうと思ったからです。



歌が終ると、まくが一度とざされました。ぶたいには、大きなはちに、まつが植えてありました。そのとなりには生花がたくさんかごにかざってありました。色とりどりの美しいこの草花も、お客さまには見えなくて、ちょっとさびしいなあと思いました。

まくがあくと、正面に、ヘレン・ケラーさんがこしかけていました。黒地に花もようのついたワンピースを着、白い夏ぐつをはいていました。さもうれしそうな、明かるいわらい顔をしています。その左がわにはトムソンさんがすわっていました。そのとなりには、岩橋武夫さんたちがこしかけていました。それから、一ばんはしに、十三四の少女がきちんと席についていまし

た。

「まず、東京ろうあ学校の生徒さんに、歓げいのごあいさつをしていただきます。」

と、司会の人がいいました。すると、一ばんはしの席にいた少女が、つと立ちあがって演だんにのぼりました。

「ヘレン・ケラーセンセイヲ　オムカエ　シテ、ホントウニウレシイト　オモイマス。ワタクシガ　コンナニ　オハナシガ　デキルヨウニ　ナッタノモ、ヘレン・ケラーセンセイノコトヲ　シッタカラデス。

セカイジュウノ　ヒトハ、ドレホド　センセイニ　タスケラレテ　イルカ　ワカリマセン。」

かく声機をとおして、高低のない、強弱のない、一本調子の声

が、このように、一音一音耳に届きました。

よく、これほどまでに話せるようになったものだ。からだいっぱいに力をこめているその努力が、高い階上のかたすみからでもうかがうことができました。時にはほえるような音になり、時には、なくような声にもなるのですが、ともかく、ヘレン・ケラーさんを、おむかえしてうれしいということが、満場の人々に伝えられました。

この少女のことばは、岩橋さんの通訳によって、トムソンさんに伝えられ、これをトムソンさんが、

ヘレン・ケラーさんの右の手のひらに伝えるのです。その伝えかたは、五本の指でたたきながら、ヘレン・ケラーさんの手のひらに、ことばの記号として伝えるわけです。まるですばやいピアノでもひくような調子に見えます。ヘレン・ケラーさんに少女の心がじかに伝わっていくのです。ヘレン・ケラーさんは、この少女の心を読みとると、トムソンさんの右手をしっかり両手でにぎりしめて、うれしそうに上下にふりました。

それから、ヘレン・ケラーさんの講演が始まりました。

その一言一言は、もう人たちや、ろうあ者たちの暗い心に、火を点じるようなものでした。まっくらなほらあなに、明かるい光がさしこむ。それは、かがやかしいことばの光です。

「目が見えなくても、耳が聞こえなくても、人と同じ感情をも

っています。同じ願いをもっています。」

人として、もう人もろうあ者も、みんな同じなのだ。働きたいと思っているのだ。差別なしに取りあつかってほしいと願っているのだ。低い声ではあるが、その中には真理がいっぱいこもっていました。その一言一言にはく手がおくられるのももっともだと思いました。写真はんのフラッシュと、えい画さつえいの光線を浴びて、ヘレン・ケラーさんはどんなに暑いでしょう。けれども、少しも苦しそうな顔をしないで、おだやかに話を進められました。

これこそ、「幸福の国の青い鳥」だと、わたしはしみじみ感じました。

三　ことばの愛

（一）　ことばの愛

「とうさん。」

と、たろうがそばへきて、外国ではどんなことばを話すかとたずねるものですから、そりゃあフランスではフランス語さ、イギリスへ行けば英語を話すように、と、とうさんがいって聞かせました。

「子どもでも？」

と、またたろうがたずねました。

たろうよ。フランスでは、おさかな屋

さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。えん筆一本買いにいくにも、日本のことばではつうじません。「今日は」。なんていったってだれもわかるものがありません。

そういう遠い国へ行くと、自分の国のことばがこいしくなります。こうしておまえたちに話すような国のことばが思うさま使ってみたくなります。国のことばで書いた本が読みたくなります。とうさんは外国に暮してみて、つくづく日本のことばのありがたさを知りました。

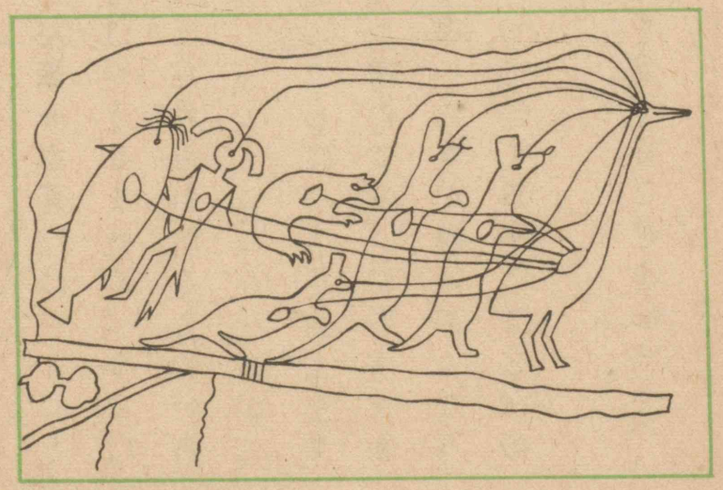
おまえたちはおさな心にも、ことばを愛することを知って、そして勉強したら、どんなにしあわせだろう。

（二）　文字の話

一　文字の始まり

このへんな絵はなんでしょうか。何かあてもののようですね。これはむかし、文字を知らないアメリカン・インディアンが、アメリカの議会へ差し出したお願いの文です。

むかし、シューペリア湖の近くにある小さな湖で、インディアンが漁業をする権利を得させてもらいたいというので、七つの村が合同してた



のんでいるのです。それぞれの動物はタブーといって、村をあらわす印です。先頭のツルは代表村のタブーで、二番三番四番の村はテン、五番の村はカモシカの子、六番の村は人魚、最後のはナマズです。

みんなの目から出た線がツルの目に結ばれ、みんなの心ぞうから出た線がツルの心ぞうにつながっているのは、みんな「注目」と「決心」とがツルによって代表されているということなのです。しかも、ツルの目からは別の線が出て、一つは湖へ一つは議会へつながっております。

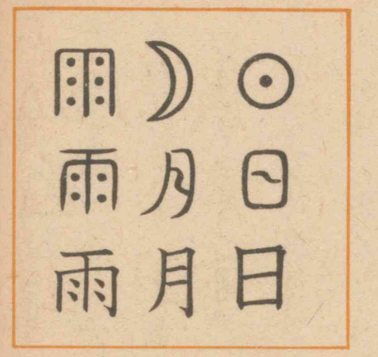
このようなかん単なものでも、人間の考えや感じがよく現われておれば、文字にかわるはたらきをします。インディアンでも、今ではこんなものは使いませんが、大むかしには世界の所

所に絵文字というのがありました。

絵文字は、この絵のように話のすじを主にしたものですが、それがある時代を経ると、一つ一つのことばを現わす文字に進みました。たとえば、「山」とか「水」とかいう漢字がそれです。

その次ぎは、ことばを組み立てている音に分けてあらわす文字ができました。まえの例でいえば「ヤ」と「マ」「ミ」と「ズ」という仮名文字です。音をもう一度くだいてあらわせるのがローマ字であることは、みなさんもごぞんじですね。「ヤ」はyとa、「マ」はmとa、「ミ」はmとi、「ズ」はzとuに分けられます。

これから文字のできかたについてお話を



いたしましょう。

2　漢字はどうしてできたか

いまでは漢字は五万以上もあるといわれておりますが、できかたのおもなものは次ぎの三種です。

その第一は、絵がそのまま字になる方法です。

「日」「月」「雨」「山」「川」「木」「竹」「馬」「鳥」「犬」「子」などはみな、はじまりはかん単な線画でした。それがだんだん線を少くし、また引きかたを一定していって、ついに字

となったのです。絵が字になるとは遊ぎのようにおもしろいではありませんか。

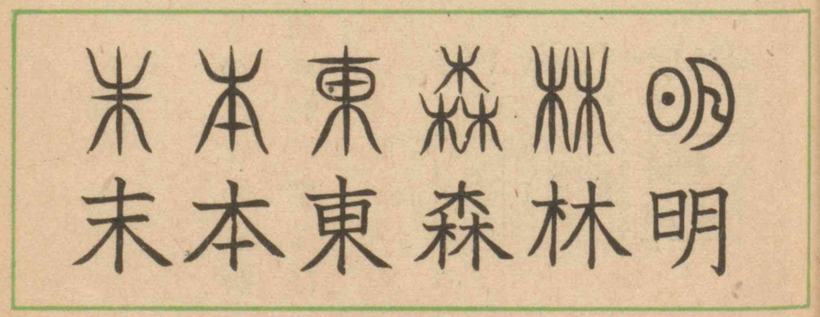
第二は絵の上へ、さらに別の意味を加えて進んでいく方法です。たとえば、日と月と二つそろえばあかるいので「明かり」となり、木と木とがならべば「林」となり、木がかさなりあえば「森」となります。まだ、日が少しのぼって木にかかった方角を「東」で表わし、木の根もとに印をつけて、ここだと教えたのが「本」(もと)で、木のえだの下の方に印をつけて、ここだと示したのが「末」(すえ)です。

そのほか、「田」で働く「力」が「男」であり、「心」を「亡(な)くす」と「忘(わす)れる」になり、「山」の「風」が「嵐(あらし)」になり、「少ない」「力」が「劣る」になり、「小さい隹(とり)」は「雀(すずめ)」となります。考えてみると、この種

類はまだまだあって、字の意味を覚える助けになります。

第三の方法は、ちょっと「二十のとびら」に似ております。「植物ですね。」というと、「木へん」とか「草かんむり」が、字の上か左についているのです。「材」「板」「柱」「根」「植」「橋」とか、「花」「芽」「茶」「草」「葉」などは、みんなこの類です。

そのほか、人べん、口へん、土へん、女へん、門がまえ、ウかんむり、竹かんむり、雨かんむり、しんにゅうなどたくさんありますね。それぞれについて、知っている字

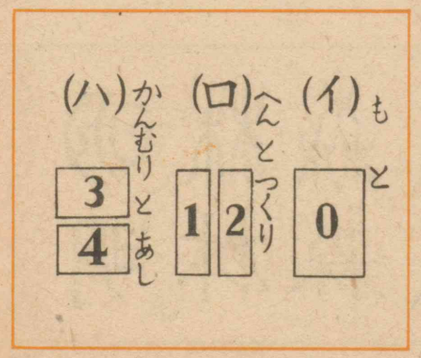


を考えてごらんなさい。

3　漢字の形と音

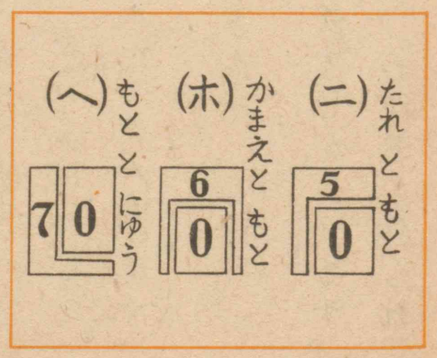
漢字の形をよく調べてみると、どの字にも次ぎの二つの点がきっとそなわっております。第一は組み立てる前の形、第二は組み立てた後の形です。

「日」とか「月」とか、「木」とか「田」とかは、みな組み立てる前の形で、しかもそのまま一字です。こういう字は、二つまたは三つが組み合って新しい字を作ります。たとえば、「林」は木が二つ、「森」は木が三つ組み合って一字になっています。



そこで、おもしろいのは、どんな漢字でもその組み立てを分けてみると、次ぎの七つになるということであります。

1. へん　明（日へん）
2. つくり　明（月づくり）
3. かんむり　花（草かんむり）
4. あし　花（化あし）
5. たれ　店（まだれ）
6. かまえ　間（門がまえ）
7. にゅう　近（しんにゅう）



私たちが漢字の字引をひくときは、いつでもこの組み立てに気をつけ、それから「かく」といって線とか点の数によってペ

ージをくるのです。

字引をひいたとき、その意味を見るのはもちろんたいせつですが、それとともにわすれてならないのは字の読み方、すなわち音です。音には「じ音」と「くん音」とがあります。たとえば、「サン、セン、ソウ、モク」（山川草木）とか、「トウ、ザイ、ナン、ボク」（東西南北）というのは「じ音」で、これを「やま、かわ、くさ、き」とか、「ひがし、にし、みなみ、きた」というのは「くん音」です。

4　仮名はどうしてできたか

仮名にはかた仮名とひら仮名とがあります。どちらも漢字をもとにして、わが国で作られ

伊江加千
イエカチ

奈乃比保三利呂
ナノヒホミリロ

たのです。その年代は、はっきりはわかりませんが、千年以上のむかしであるといわれています。

かた仮名とひら仮名とは、だれが見ても感じがまるでちがいますね。なぜでしょうか。これがわかれば、できかたもすぐわかります。

それは漢字でいえば、かい書と草書のちがいです。つまり、四角な字とまるい字です。かた仮名は全部とはいえませんが、多くのものが漢字のかい書からできています。そしてひら仮名はその全部が漢字の草書からできているのです。また、かた仮名はその全部では

安 以 宇 衣 加 幾 久 左
あ い う え か き く さ

ありませんが、大部分が漢字の字形の一部分から作られており、ひら仮名はその全部が漢字の字形から作られております。

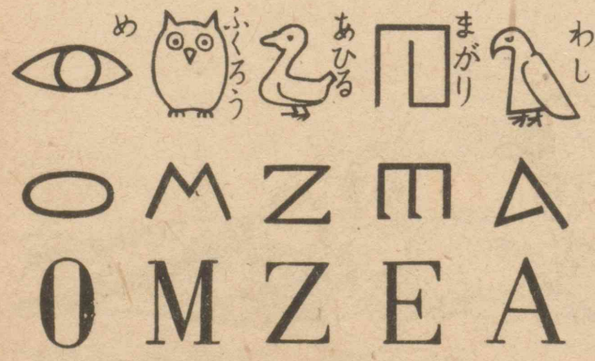
こうしてできあがった仮名には、その字の名まえだけが残りましたが、もとの漢字についていた意味はなくなってしまいました。仮名の名まえはその字のはたらく音です。

5 ローマ字のできかた

ローマ字もいちばんはじめは絵文字でした。それがだんだん形が移り変わって今のよ

之 寸 太 知 川
し す た ち つ

うになりました。今では絵文字時代の意味はどの文字にも残っていません。また、文字についている名まえも、あるいは時代によって、あるいは国によってちがうこともあります。けれども、はたらく音はわりあいによく似ていますから、世界に広く通用するのです。



四　工夫の楽しみ

（一）こわれたポータブル

「ひろすけ、もう起きなさい。学校ですよ。」
おかあさんの声に、しぶしぶ頭をあげたひろすけが、柱どけいを見あげると、なるほど七時過ぎていた。しかし、あわてなくてもよいとひろすけは思った。ご飯をいそいで食べて、うちをでればもうすぐそこが学校である。顔あらいが五分、ご飯が十分、とちゅうが十分、大じょうぶ。

は、全くひまです。そこで村人は全部、何かしら細工物を作ります。どういうものか、ユーラの村人はそろいもそろって、手先が器用で、頭がちみつですから、他の国の工場などで働こうという人があると、引っぱりだこのありさまでした。

時は千六百八十年のある日のことでした。長い間、山を下って、他国の工場で働いていたエアンというひとりの青年が、久しぶりで、ユーラの村に帰ってきました。山にさえぎられ、雪にとじこめられている村人は、こうして他国から帰ってくる人があると、まるでりゅうぐうからきた人ででもあるように、めずらしがって、むかえるのでした。

「エアンが帰ってきた。」

ということばが、ラジオの放送のように村じゅうにひびいて、

わかい人も年とった人も、ぞろぞろとエアンの家におしかけてきました。

「やあ、りっぱになったなあ。」

「どこの国へ行ってきたかね。」

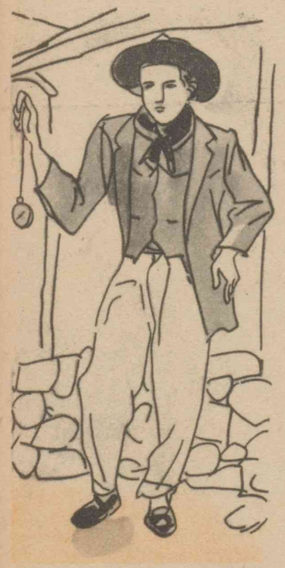
「どんな仕事をしてきたの。」

というように、次ぎ次ぎにたずねます。村人のひとりが、エアンのむねのあたりに、あまり見かけないものを見つけました。

「エアン、おまえのむねのところにある、その光るつなはなに？」

「これですか。」

といって、エアンは得意そうに



その銀色のつなをするするとひっぱりました。するとチョッキのポケットから、同じ銀色をした、まるいまんじゅうのようなものが、そのつなの先にぶらさがって出てきました。これこそエアンがいちばんじまんのおみやげであったのです。

「これは、とけいというものでね。つまり時をはかる機械です。ロンドンで買ってきたんだが、むこうではこんなすばらしい機械ができているんだから、まったくかないませんよ。みなさんもよく見てください。」

こうした細かな細工物にしゅみを持つ村人たちは、たまげきっ

て見ています。
「おどろいたもんだなあ。あんな小さな虫みたいなものが、くるくる動いているぜ。」
「こんな小さなものが、ひとりで動いて、ひとりで時間を知らせるなんて、まったくたまげたものだ。」
「それにしても、エアンはしあわせものだ。こんなすてきな機械を手に入れてきて——」。
こうして、とけいを持っているというだけで、エアンはユーラ村の人気者になってしまいました。
ところがある日のこと、エアンの大じな大じなとけいが、ぴたりと止まったきり、おしてもひいても、いっかな動かばこそ、だまりこんでしまいました。エアンは顔色を変えておどろきま

した。それもそうでしょう。もしこのとけいが止まったきりになってしまったら、それといっしょに、エアンの人気も落ちてしまうかもしれないのです。なんとかなおしたいものだと、うらのふたをあけてみると、あまりこみいっていて、とてもみている勇気もでません。またふたをして、
「どこにこしょうがおこったのやら、てんでけんとうがつかない。どうしてもこれはロンドンまで持って行かなければなるまい。」
と、しょげきっています。
エアンのとけいが病気になったと聞いて、正じきな村人たちは、ぼつぼつ見まいにきました。
「それは、お気のどくだ。ものはためしだが、一度リハルトに

見せたら……。」
ひとりがいいだしました。他の人々は、
「そうねえ、あの子どもは機械気ちがいにはちがいないが、いくらなんでもかい中どけいには歯が立つまい。」
「なにしろ、どけいなんて、まだ見たこともないんだろうから。」
「だめだろうよ。いなかの機械と、ロンドンの機械とは、たちがちがうから……。」
と、頭からばかにして、とりあいませんでした。
けれども、何日たってもとけいはいきかえりませんので、どうせだめだろうとは思いながら、とにかく、リハルトをよんで、見せることにしました。
「おい、リハルト。これはロンドンから買ってきたとけいだ。

高い機械なんだがね。ちょっとぐあいが悪くなったのだ。どうだ、おまえになおせるか。だが、むりをして、こわしてしまってはいけないよ。高いめずらしい機械なんだから……。」
ものをたのむのか、おどかすのかわからないようないいかたです。
リハルトは、やっと、十三四の子どもですが、「機械気ちがい」「機械小ぞう」と、あだなをつけられているだけあって、機械にたいする熱心さは、実におどろくばかりでした。これまでも自分の考えから、いろ

いろこみいった機械を作ったこともありますし、機械がこわれたなどと聞こうものなら、どこの家の機械でもかまわず、自分から出かけていって、なおすというありさまでした。日どけいならいくつもこしらえたことがありますが、ほんとうのかい中どけいはまだ見たことがありません。

エアンの手から止まったとけいを受けとったリハルトは、別におどろくようすもなく、すぐさまうらのふたをあけました。そうして、一つ一つのねじをぬき、歯車をはずして中をのぞきこんでいましたが、やがて、

「うん、これはわけなくなおるよ。」

といいます。

「なおるかい？おまえに。」

「ああ、ぼくにだってなおせる。」

「いやにあっさりいうが、大じょうぶかい。」

「大じょうぶさ、こんなおもちゃみたいなもの。」

「じゃあ、さっそくなおしてもらおうか。」

そうそう手軽になおるものかというはらがみんなにあるものですから、子どものリハルトにたいして、こごとでもいうようなことばつきです。

「ええ、なおしてあげよう。けれども、五とおりか六とおりの道具がなくてはだめだよ。」

「じゃあ、やっぱりなおらないんだなあ。」

「なおるさ、その道具さえあれば……。」
「その道具はロンドンに行かなくたって、自分でこしらえればできる。ただそれをつくるのに、三四日ひまがかかる。」
どこまでも自信のありそうな話ですから、エアンはリハルトにたのむことにしました。リハルトは三四日かかって、しゅうぜんに入用な道具をこしらえました。それで、こしょうをなおすと、しばらくねむっていたとけいがコツコツと動くようになりました。
「リハルトがエアンのとけいをなおした。」
これが村中の大評判になりました。
「それはえらいやつだ。おれもあれはただの機械いじりではな

いと思っていた。」
などと、今になってそんなことをいう人も出てきました。リハルト少年は急にえいゆうのたまごかなにかのように、尊敬されるようになりました。
「あの子どもは、いまにきっとエアンが持ってきたのに負けないような、りっぱなとけいを作るかもしれないぜ。」
という人々の想像が、いつのまにか、
「リハルトは、エアンのとけいを改良して、もっといいとけいを新しく作りはじめたよ。」
という、まことしやかなうわさとかわっていきました。
こうなると、エアンの人気は、落ちてしまって、機械小ぞうのリハルトがユーラの村の人気者となりました。

エアンのとけいをなおしてみると、その組み立てのおもしろくできているのに、リハルトはすっかり感心してしまいました。

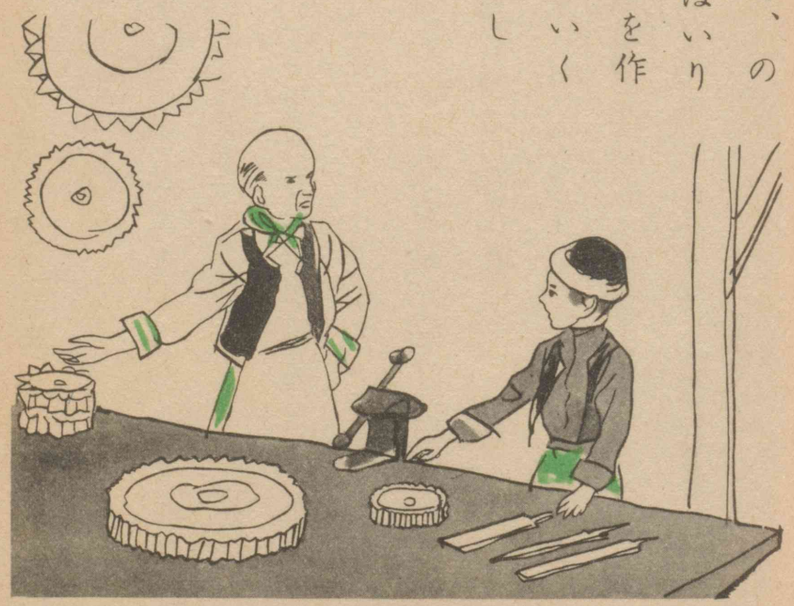
「おもしろい。まったくおもしろい機械だ。そしてちょうほうだ。これからはどんな人も、かい中どけいを持たなくてはならない世の中になるだろう。そうすると、世界中の人間の数だけかい中どけいがいることになる。これはとても大へんな大仕事だ。そうだ、ぼくはとけい屋になろう。とけいだって何のことはない。歯車じかけだ。歯車さえ作ることができれば、あとはわけない。」

こう心にきめたリハルトは、自分の手製のしゅうぜん道具を持って、村をはなれ、山をくだって、歯車製造の本場と聞いたゲンフの町へと出かけて行きました。

いよいよゲンフの町について、のぞみどおり歯車工場の職工にはいりましたが、そこの主人は、歯車を作るひけつを教えてくれません。いくど手をついてたのんでも相手にしないのです。

「それはおまえ、自分で考えたらいいだろう。せっかく苦心して考え出したものを、むざむざ人に教えられるものか。」

「ようし、教えないというの

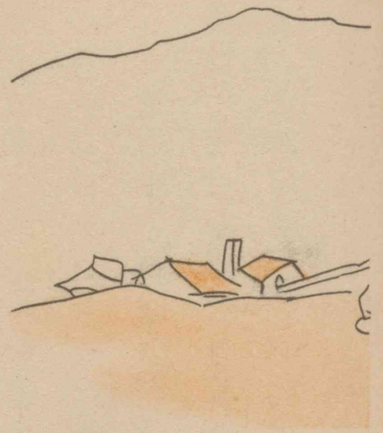


なら教わらない。人の考えつくものを、自分に考えられないことはない。」

と決心し、リハルトは二度と教わろうとはしません。そしてあい変わらず、歯車工場に働きながら、夜となく、昼となく、工夫に工夫を重ねて、とうとうりっぱな歯車の作り方を考え出したのです。

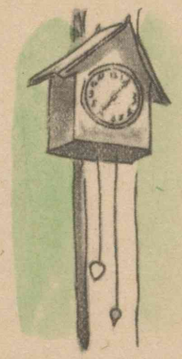
何年ぶりかで、機械小ぞうのリハルトは、アルプスの山のふところ、ユーラ村に帰ってきました。そしてエアンのような根のない人気者ではなく、ことの力をもった人気者となりました。

リハルトはユーラの村に、小さいな



がらも、整ったとけい工場を造り、たくさんの村人をやとって、とけいをこしらえることに手をつけました。世の中は、だれでも一つのとけいはぜひいるように進んできました。そうなるといくら作っても間にあいません。

まして、機械にかけては天才をもっているリハルトが自分でいちいちかんとくし、手先の器用さにかけては他国人のまねのできないユーラの村人が、たましいをうちこんで作るとけいですから、その正しさ、調子のよさは、他にくらべるものがなく、たちまちのうちに、「スイスどけい」として、世界中にも名高くなりました。



エジソンは一日のうち、三時間しかねなかったり、いくばんも夜ふかしを続けたり、研究にむちゅうになってとけいをゆでたまごにしたり、……いや、あれはちがった。

たまごのほうはニュートンだったかもしれない。それにしても、ぼくは少しねすぎるようだ。もう少し早く起きるようにしよう。

ああ、それにしても、ゆうべは少し夜ふかししたな。どうもあの変圧器のコイルまきは、きれいにまけなくて時間ばかりかかって……。」

「ひろ、早く起きないと学校がおくれるぞ。」

「うん……。」

ひろすけは、たいへん理科のすきな少年である。望遠鏡を自

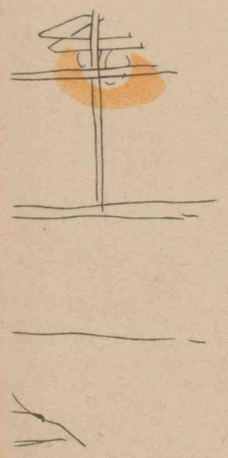
注文は後から後からと、限りなくやってきました。それとひきかえに、金、銀、白金等がどしどしはいってまいります。ユーラの村は、みるみる大きくなり、にぎやかになり、はなやかになっていきました。

リハルトの工場は、その子どもの代になっていよいよさかんになりました。千七百四十一年、リハルトの死んだころには、毎年十三万このかい中どけいと、千このふりこどけいが、ユーラの村からヨーロッパに送り出されています。

二重のまどの間に、はかなくさくうすむらさき色のサフランの花よりほかに、目を楽しませる何物もなかったユーラの町にも、それ以来、こがね、白がねの花がまばゆくさいて、今になってもしぼもうとはしません。

分で作って月の面をのぞいて、テイヒヨ山の口からひろがる放しゃ線を見つけだしたり、プレイヤデス星団の美しいのにびっくりしたり、今度は写真機を自作して弟と妹を写してみたり、というとかん単だが、望遠鏡を作るのにも、写真を写すのにも、たっぷり三か月以上も研究や製作に打ちこんで、何回作りなおしをするかわからないほど根気がよいのである。だからそれができあがったころは、だいたいそのほうのことはそうとうの専門家になってしまう。そんなふうだから道を歩く時も注意ぶかい。この間のばんも、電燈がガラスにうつっているのを見て、

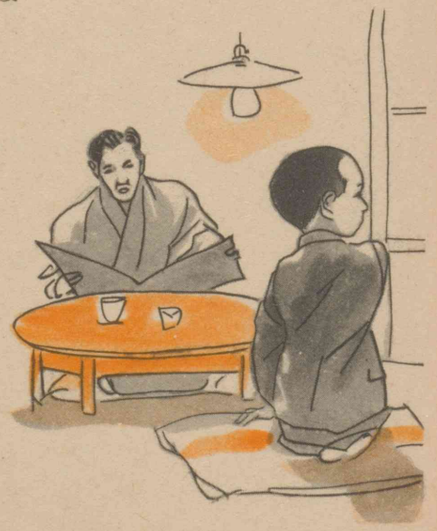
「おとうさん。ガラスは一まいなのに、なぜ電燈が二つうつって見えるのだろう。」



「いったいガラスは、どうして光を反しゃするのだろう。」

「ふつうの物は光を通さないのに、ガラスはどうして光を通すのだろう。」

と次ぎ次ぎに質問をして、父をこまらせたものである。まあ、ひろすけはこういった子供なのである。



小林先生は、今度、新しく入学してきた一年生の受持である。たいへんやさしくて、それに、ダンスのじょうずな先生である。

だから一年生を受け持つと、子供たちと唱歌を歌ったり、遊ぎをしたりしてくださるので、子供たちもとても喜んでいる。

ちく音機がほしいな…。電ちくならなおうれしいけれど…。小林先生は、町のある店ですばらしい音をさせていた電ちくのことを思いだしていた。あれで楽しい童ようのレコードをかけて、子供に遊ぎをさせたら……。先生は子供たちの目を思いうかべた。そうだ、学校にポータブルがあったっけ。あしたさがしてみよう。小林先生は、あくる日、さっそく職員室をさがすと、たなの中にいろいろな書類の下になって、ほこりにまみれたポータブルがあった。

取り出してほこりをはらってみると使えそうである。ねじをかけてまわしてみると、ごとごととまわるが、機械が調子づい

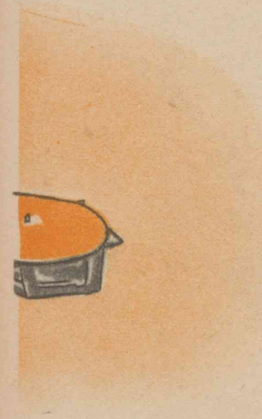
てくると、ガリガリとひどい音がしはじめるのである。まいてみたり、まわしてみたり、止めてみたり、先生はだいぶいじってみたが、このガリガリはなかなかなおりそうもない。そこへ、あつらえむきにはいってきたのがひろすけである。ひろすけは、実は自分の受持の徳山先生に、そうじのできたことを報告にきたのであるが、先生がいらっしゃらなかったので、ついに小林先生につかまったわけである。

「ひろちゃん、あなた機械がすきでしょ。これ、なおしてよ。うちへ持って帰ってもいいから。」

「はい。でも、ぼくになおせるかしら……。」

思いがけないことだったので、ひろすけもちょっとおどろいたが、もともとこのようなことの大すきなひろすけは、それでも、おっかなびっくりで、うちへ持って帰ったのである。

さて、ポータブルちく音機を持って帰ったひろすけは、自分の室へはいるなり、ポータブルを前に置いて、考えはじめた。あのへんな音は機械の中でするのだから、一度取りはずさなくてはならない。それならば、どのねじをゆるめればよいか、ゆるめていけないねじはないか。それはわかった。でははずしてみよう。中にはど



第一図

んな機械があるだろう。ひろすけはねじまわしで、上板のまわりを止めてあるねじをそろそろとぬいていった。ぬきとったねじは、小さなはこに大じそうに一つ一つ入れた。

いつか目ざましどけいを分解していて、ねじを一つなくしてしまって、とてもこまったことがあった。それから、はずしたねじは、こうしておくことにしたのである。ぬき終ると、板のふちに手をかけて、ぐっと持ちあげた。中から出てきた機械というのは、ひとかたまりの小さなしかけだけである。（第一図）

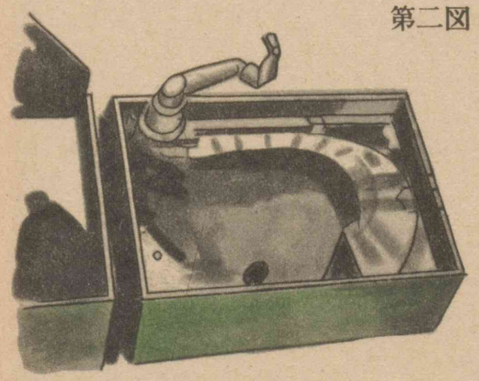
ひろすけが見たものを書いてみると、

1. 丸い大きな「かん」。

2.それをはさむように取り付けられた、二まいの大きな歯車。
3.小さな歯車が二つと、それにかみ合う中ぐらいの歯車二つ。
4.ウオームと、そのじくについている、丸い二つの玉。

たったそれだけである。どんなすばらしいしかけになっているかと、ラジオの中のようなものを想像しながら、手を動かしていたひろすけは、おやおやと思わないわけにはいかなかった。これでよく、あんなりっぱな音楽が出るものだな……。ここでねじをかけて調べてみると、この機械はただ、レコードをのせる台をまわすだけのしかけであることがわかった。

第二図

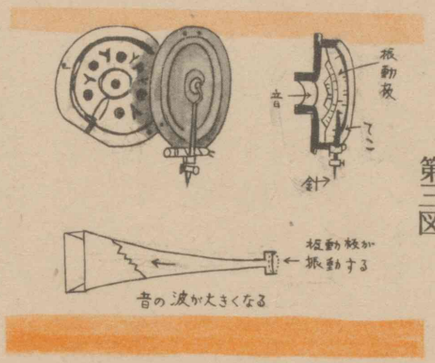


では、あの音楽を出すのはどこだろう。機械を置いたひろすけは、今度ははこの方を調べた。（第二図）こちらもすこぶるかん単である。

1.ラッパのようにひらいている四角な木のつつ。
2.それにつながっている金属のまるいつつ。
3.その先についているサウンドボックス。

どこにあんなりっぱな音を出すしかけがあるのだろう。サウンドボックスのはりに指をあてると、サラサラと大きな音になる。サウンドボックスをはずしてみると、図のようになっていることがわかった。（第三図の断面）はずしたままで、はりにさわっても、かなり大きな音である。耳元にもってきてやってみると、とても大きな音である。これから管を伝わる間に、音

はこの管の通りにひろがって、大きな音になるのだな。楽隊のラッパや、メガホンと同じなんだ。レコードのみぞに、このはりがはまる。レコードがまわるにつれて、このみぞの波がはりをしん動させる。そのしん動が音楽として聞こえるわけだ。



第三図

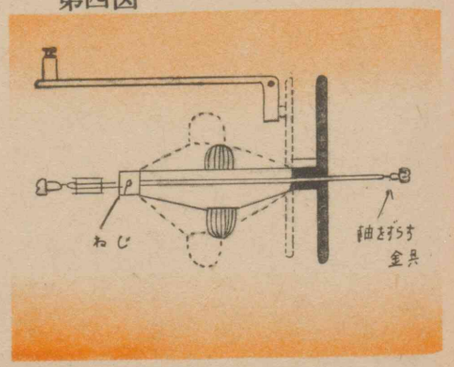
すると、あのへんな音は、どこだろう。もう一度機械の方に向いて、ひろすけはねじをかけた。そしてまわしてみると、少し勢がついてきて、ガリガリガリと、今にもこわれそうなすごい音がするのだった。歯車はどこにもさわっていない。このすばらしい速さでまわる二つの玉が、どこかにぶ

つかるらしいぞと、回転を止めてみると、二つの玉はすうっと寄り合ってせまくなる。おや、またまわしてみると、勢がつくに従って、ひろがっていき、大きくまわる。わかった。この玉が外わくにぶつかるのだ。

（第四図）

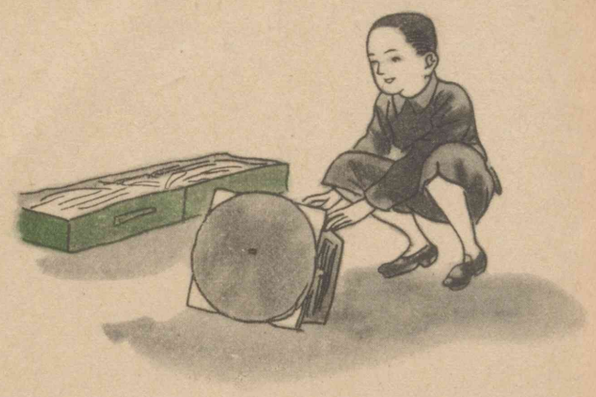
それはなぜか。その前に、いったいこの玉はどんな役目をしているのか。ひろすけの疑問がそこにひっかかってしまって、まわしたり、止めたりする度に、機械はガリガリと悲鳴をあげる。その度に、玉もひろがったり寄ったりする。おや、玉がひろがる時、この円板が寄ってくるぞ。ああ、ここにブラシがある。これで円板にさわるようになっている。

第四図



これでさわるとどうなるか。ブラシのてこを動かすと、ブラシがうまく円板にさわった。すると回転が急におそくなった。はなすと速くなって、玉がひらきすぎて、ガリガリと始まる。何度もやってみた。わかった。このブラシが届かないのだな……。

ひろすけは、機械の回転を止めて、ブラシをていねいに調べた。ブラシはラシャで作ってある。それが黒くなってすり切れている。あまり使いすぎたのだな。ではどうすればよいか。つまり、この円板をブラシに近づければよいのだ。そのつもりで調べると、じくをずらす金具（一）と、ねじ（二）が見つかった。このばあい、（一）のほうでずらすのがかん単らしい。ひろすけは、ねじまわしで少しずつ左右のねじを動かして、このじくをブラシの方へ寄せた。これでブラシのききがたいへんよ



くなったようである。さて、と機械をまわしてみると、玉もひらき、円板が寄ってきてブラシにさわって、もうそれ以上速くはまわらない。そしてガリガリという音をたてなくなった。たったそれだけだったのだ。つまり、ブラシのラシャがすり切れて、まわりかたが速すぎただけのことだったのだ。

あの町この町、
日がくれる、日がくれる。
いまきたこの道、

帰りゃんせ、帰りゃんせ…。

あくる日、小林先生の教室のまどから聞こえるレコードに、ひろすけはうれしそうに耳をすましていた。

そしてあのサウンドボックスの一まいのしん動板から、どうしてピアノはピアノらしく、歌の声は歌の声らしい音を出すことができるのだろうか。また、ピアノと歌声が、同時に出ているのはどうしてか、それればかりではなく、ラッパ、ふえ、バイオリン、ピアノと、たくさんの楽器の音を一度に出すことができるのは、どうしてだろうと考えていた。

（二）スイスのとけい

ノイエンブルグの町を出はずれると、四方は高い高い山また山で、おごそかなけしきが目の前にひらけます。

「あの山のかげは、もう、この世ではあるまい。」

と思うほどですが、実はなかなかそうではないのです。山と山との間の細いすきまを、つづらおりにぬってのぼりつめると、そこに思いがけなくも台地がひらけていて、人家はちらほらながら、一つの村里がつくられています。ここはスイスのアルプス山中、海ばつ一千メートルのユーラ村です。

もとよりいいようもないひどいあれ地で、ざくざくの岩のかけらの積み重なった地面は、一本の野菜もできず、一つぶの赤

いくだものもみのるところではありません。ま夏でもまどを二重にせねば、夜の寒さをしのぎがたいくらいですから冬の寒さといったら、まったく想像もおよばないひどいものです。

ふもとのノイエンブルグで、むらさき色にじゅくしたぶどうをとりいれる秋ばれのころ、ユーラの村はもう一面銀世界で、ふきあげふきおろす雪のうずまきに、一歩も家の外に出ることはできません。

ユーラの村の家は、半分以上、アルプスのぼりの旅人をとめる宿屋ですが、これとても夏だけの商売で、秋から春にかけて

五　冬の生活

（一）　スキーの話

雪におおわれた山や野を、すべりまわるスキーのつうかいさは、実際にやってみた人なら、だれでも知っています。まだやったことのない人でも、ほかに類のないそのつうかいさを想像することはできるでしょう。

スキーは、都会の人や、学生のスポーツですが、一方、雪国に住む人にとっては、スポーツであると同時に、じつに便利な交通の要具です。

雪国で生活したことのない人には、ちょっと考えられないでしょうが、日本でもヨーロッパでも、スキーの無かったころの雪国の人たちの生活は、どんなにみじめだったか知れません。道も川も野も山も、家までも雪にうずまって、三か月も四か月も、せまい家の中にとじこめられていたのです。

それを思うと、スキーを多くの人に知らせた人の手がらは、口や筆にはつくせないほど大きいのです。

さて、それでは、ヨーロッパにスキーをしょうかいした人はだれでしょう。それは、オーストリーの南の方の山間チロル地方のリリエンフェルトというところに住んでいた、ズダルスキーという医師なのです。

もちろん、そのまえから、北ヨーロッパのノールウェーやフィンランドには、スキーがあったのです。しかし、ヨーロッパでも、千八百年代は今ほど交通機関が発達していませんでしたから、北のすみともいうべきノールウェーやフィンランドのことが、中央ヨーロッパには、なかなか伝わってきませんでした。

ところが千八百五十五年に、ノールウェーの名高いたん険家ナンセン博士が、そのころはまだ人間が住んでいなかった北氷洋のグリーンランドという大きな島を四十日で横断しました。その時ナンセン博士は、スキーを大いに利用したのです。そして、「グリーンランドたん険記」という、りっぱな本をあらわして、世界にグリーンランドという無人島をしょうかいしたのですが、

その中に、自分が利用したスキーのことも書いてありました。

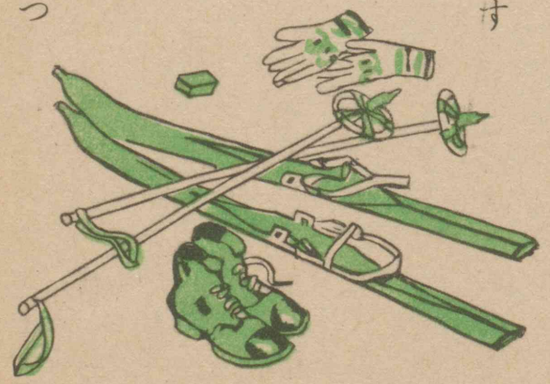
ズダルスキーは、このナンセン博士の本を読んで、スキーに興味をもったのです。それからいろいろと苦心して、一台のスキーを、ノールウェーから手に入れました。

ノールウェーやフィンランドは、おかの多い地方で、大きな山はありません。したがってズダルスキーが手に入れたスキーも平地やおかにてきするようにできていました。ことに、スキーとくつをむすびつけるしめ具は、かん単な一本の皮ひもだったそうです。

ところが、ズダルスキーの住むオーストリーのリリエンフェルトは、アルプス山脈の一地方ですから、大きな山が多く、この皮ひものしめ具は工合いがよくありませんでした。ズダルスキ

ーは、冬になると、ひとりで近くの山々をスキーですべりました。だれからも教えられないで練習を続けたのですが、研究心の強いズダルスキーは、すべりまわるのに便利なように、だんだん改良を加えていきました。

まず急しゃ面をすべったり、のぼったりする時に、くつがぐらぐら動かないように鉄でしめ具を作りました。そして、重いスキーをなるべく軽くするために、そのしめ具の中に、バネをしかけたのです。それから、当時はスキーぐつという、特別のものがなかったので、だれでもふつうのくつでスキーがはけるように、くつ



台をのびちぢみできるようにもしました。またノールウエーでは、平地が多かったので、両づえ(二本づえ)だったのを、長い一本のつえにしました。そして独力で、スキーのすべりかたもいろいろと考え出したのです。

このズダルスキーの努力で、スキーは、ヨーロッパの各地に、たいへんな勢でひろまっていきました。そのすべりかたはズダルスキー式、またはその土地の名をとって、リリエンフェルト式とか、オーストリー式などとよばれました。

日本にスキーが伝わったのは明治四十二年、そのころスエーデンの公使をしていたすぎ村という人が、三台のスキーを外務

省に送ってきたのがはじめてです。それがズダルスキー式でした。そのスキーを、外務省から雪で有名なにいがた県の高田市に送って、研究をさせました。ちょうどそのころ、オーストリーから日本にきていたフォン・レルヒ中さが先生になって、十数名の人々に指導しました。

レルヒ中さは、高田市のある会社に国産のスキーを作らせ、次ぎの年に、高田の町近くのかなや町で、みごとにすべってみせました。それから数年のうちに、全国にひろまるようになったのです。

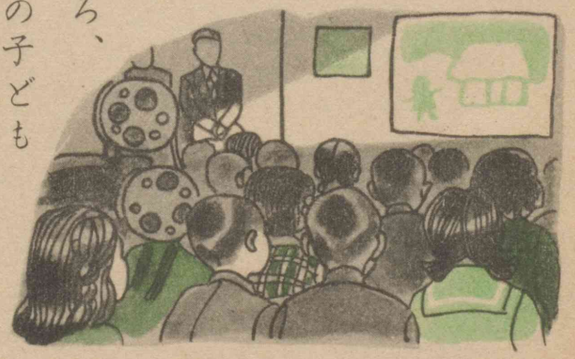
(二) 雪のえい画

雪のえい画を二つ見た。一つは「雪国」というのであり、もう

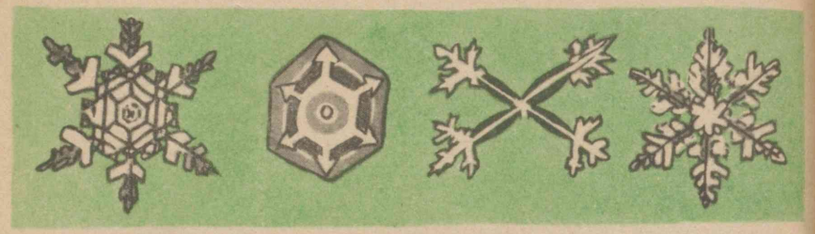
一つは「雪」というのであった。

「雪国」は、北国の人たちが、雪と戦っているようすを、えい画にしたものである。

雪がふりだしてから、だんだん積もるようす、深い雪の中で生活している人々、そのうちに、ようやく春の光がさしそめて、さすがの雪もそろそろとけはじめていくところ、雪どけの水が流れだすところ、それをうれしそうに見ている村の子どもたちなど、雪がふってから消えるまでのありさまを、時間の順序をおってうつしたものであった。



もう一つの「雪」というのは、雪の景色を写したものではなく、雪の一ひらをとらえてえい画にしたものである。ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、まことにきれいな形をしていること、しかも、一ひら一ひらの雪が、それぞれちがったけっしょうをしていること、その美しい雪が数限りなく、天上から地上へふってくることなどを写している。



また、どうして雪のけっしょうができるのか、どんな場合に、どのようなけっしょうになるのか、空中の温度の変化、風の関係、水じょう気の量、地上からの高さなど、さまざまなことによって、雪のけっしょうがちがうわけを、えい画的手法に

よって、よくわかるようにしくんだものであった。

空からふってきた雪の一ひらを受け取って、それをくわしく観察してみると、その雪が、どこで、どのようにしてできたか、その雪が通ってきた空中のようすが、しぜんにわかるというのである。

「雪は、空からのお手紙です。」

こんなことばによって、えい画は私たちに説明してくれた。一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、確かに空からの手紙にちがいない。「空からのお手紙」とは、うまくいったものだ。

このように、二つのえい画は、どちらも雪にえんのあるもの

であるが、私は後のほうのえい画に心をひかれた。

ふんだんにふってくる雪の中から、一ひらの雪をとらえて、いろいろな角度からながめてみることは、つつましい心なしにはできるものではない。野原の中で、一本の草花を見いだして、それをたんねんに写生するのも、一ぴきのこん虫を調べるのも、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

「雪国」のえい画も決して悪いも

のとは思わないが、いま少し深く考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。たとえば、ふぶきなどもその一つである。風にあおられた雪の群が、道を消し、木を折り、汽車を立ち往生させ、人をたおし、こごえ死にさせてしまうことさえある。このものすごいありさまをえい画化することは、たやすいことではあるまいが、ばんそうの音楽や、場面の組み合わせと説明のことばなどによって、かなり生き生きと表現することができそうである。

ふぶきのやんだ後の、雪の野原のありさまをうつしてもおもしろいと思う。一面の銀世界となった広い野原を、第一の人が歩いて行く。その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。やがて第三の人も通り、第四第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。ぽつりぽつりとした足あとが、広野を横切る一すじの道となる。その一すじの道をながめると、一直線ではなく、くねくねとゆがんでいる。歩く人は、はじめはまっすぐに歩こうと思ったので

あろうが、いつのまにか曲がってしまう。どうしてこんなに曲がるのか。風にふかれたからであろうか。足がつめたくなって、立ち止ったためであろうか。それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであろうか。

こんなふうに、たとえ一本の雪の道でも、見方によっては、おもしろいことが、次ぎから次ぎへと考えられるのである。

雪国でいちばん楽しいものは、なんといっても、春さきの雪どけごろである。半年も雪にとざされていた地上に、ぱちっと黒い土が見え始めた時の喜びは、たとえようがない。子供たちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんでみたり、しゃがんで土のにおいを

かいだり、手のひらでなでてみたり、耳を地べたに近づけたり、なにか物の音でも聞こうとしたりする。

やがて黒いやわらかい土で、ねっ木という遊びが始まる。こままわしが始まる。

こんな場面を、おもしろく編集して、えい画に表わせないものだろうか。

同じ題の作文でも、それをとりあつかう人によって、文章は、どのようにも書き表わされる。

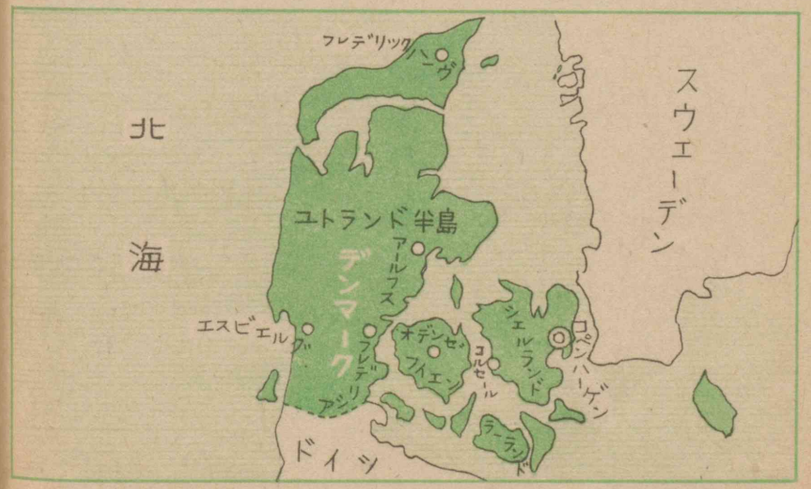
どのような文章でも、読む人の心がひかれるのは、物事をあたたかくながめた人によって書かれた文である。

六．デンマークの二本の柱

（一）　二本の柱

世界中でいちばん小さい国のひとつでありながら、世界中でいちばん幸福な国のひとつ。

ひとしずくの石油もわかず、石炭も鉄こうもほとんど全く出ず、水力電気にもぜんぜんめぐまれていないというふうに、近代産業の栄える条件が欠けているのに、こじきはもと



より、ひどい貧ぼう人のいない、もっともゆたかな国のひとつ。

トマトやブドーがほとんどみのらず、満州でさかんに作られるダイズやトーモロコシさえも、花はさくが、実はみのらないというふうに、気候風土にもめぐまれない国でありながら、世界第一の農業もはん国といわれる国。

そのデンマークもはじめから幸福な国だったのではなく、むしろ歴史をさかのぼれば、もっとも不幸な国の一つであり、ことに今から八十年ほどまえ、戦争に負けたあとなどは、全くみじめな国でした。たびたびの戦争につかれていた上に、敗戦のだげきを受け、国民はすっかり気力を失い、国としてはもう立ちゆくみこみがないと思われるほど、どん底に落ちこんだデンマークが、わずか数十年の間に、どうして幸福な平和な国をき

ずくことができたのでしょう。

それは、千八百六十四年ドイツとの戦いに敗れたその日から、「外に失ったものを、内に取り返そう」とかたく決意して、デンマーク復興のために立ちあがったダルガスの力にまつところがきわめて大きいのです。豊かな土地をうばわれ、大部分やせた不毛に近い土地を残されて、失望のふちにしずんでいる国民をはげまし、防風林もなかなか育たないところに、まず木を植えてかかろうとしたダルガスの苦心は、なみたいていのものではありませんでした。そしてそれは、かれとかれの同志の力だけではとうていできることではなかったのです。ダルガスが植林事業を始める前に、人を植える大事業をこつこつやっていた大学者グルントウィーがいなかったら、ダルガスの事業は、決し

て芽をふくことさえできなかったでしょう。学者として宗教家として世界的に有名なグルントウィーは、何事をするにしても、まず人を植えなければならない、そのためには学校という畑を作らなければならないという考えから、今では世界の名だたる国民高等学校というものを、千八百四十四年ごろから始めたのでした。二十年の間そこで次々に教育された人物があったればこそ、敗戦の祖国を平和な道で立てなおそうと立ちあがったダルガスの精神も理解され、その事業もなしとげられたのです。一見何の関係もないようですが、グルントウィーの教育事業と、ダルガスの植林事業とは、

こうして深く結びついて、幸福なデンマークを作りあげたのです。グルントウィーの精神的な下ごしらえがなかったなら、ダルガスの大がかりな土木事業はなしとげられなかったでしょうし、ダルガスの国土改良が行われず、農業がさかんにならなかったら、グルントウィーの精神も栄えるわけにはいかなかったでしょう。ノーベル文学賞を授けられたノールウェーの大詩人ビョルソンは、

「デンマークの農民は、世界のどの国の農民よりも高い教養を持っている。」

といっていますが、グルントウィーの力によってデンマーク人が教養を植えつけられていたからこそ、ダルガスのこん難な仕事もできたのであり、ダルガスによって国土が豊かにされたか

らこそ、今日デンマーク人はそれほど高い教養を身につけることができるようになったのです。

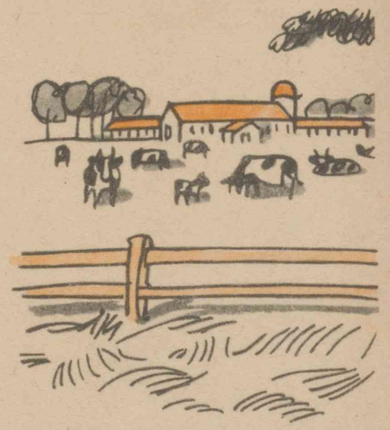
実際に、ダルガスが植林とこう地の開たくを始めたとき、グルントウィーの国民高等学校の運動も、それとならんでさかんになっていました。ダルガスの事業をはかどらせたのは、国民高等学校の卒業生でしたが、かれらが植林や開たくに示した真剣な活動ぶりによって、国民高等学校は、いっそうさかんになっていったのです。グルントウィーとダルガスは、ほろびようとするデンマー

クをささえた二本の柱だということができます。

「神は自ら助くるものを助く。」

それがグルントウィーの教育の出発点でしたが、ダルガスもまた、戦いにやぶれて他国をうらまず、他国にたよらず、自らの力をたよりに立ちあがったのです。

デンマークはドイツ、オーストリーと戦って、文字どおり一敗地にまみれ、いちばん土地のこえたシュレスウィヒ・ホルシュタイン地方をうばわれましたが、ダルガスはこれを取り返すことを考えず、残されたこう地を豊かにするため、土にいどみかかったのです。グルントウィーとその弟子たちは、ドイツとの境に



ほう台をきずくかわりに　学校を建てました。

まことにかれらは、けんを持って外と戦おうとはせず、スキを持って内をたがやしたのです。旧約聖書のあの尊い精神が力強く実行されたのでした。

かくして、そのけんを打ちかえしてスキとなし、
そのヤリを打ちかえしてカマとなし、
国は国に向かいてけんをあげず、
戦争のことをふたたび学ばざるべし。

こうしてデンマークはよみがえり、豊かな平和な国がきずきあげられました。土地をたがやしては、世界一の農業国となり

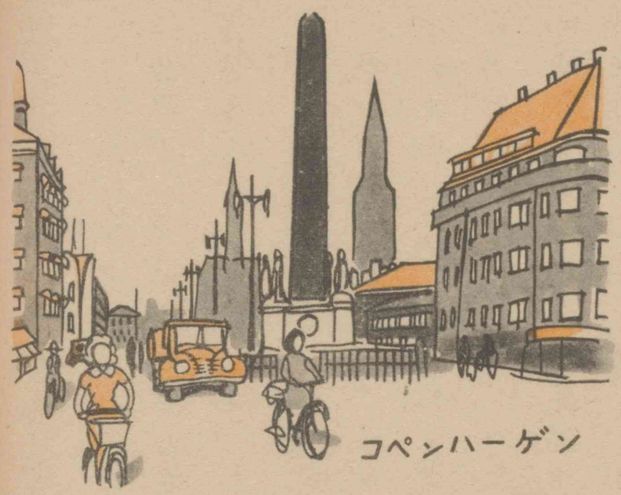
人を養っては、世界で指折りの文化国となりました。広さや人口からいえば、戦争前の日本の二十分の一ぐらいですが、外国貿易にかけては、日本の貿易総額の二分の一に達していました。つまり、デンマーク人ひとりあたりの貿易額は、日本人の十倍に当っていたわけです。文化の方面でも、いっぱん国民の教養が高いことは前にも書いた通りですが、みなさんにもなじみの深いアンデルセンのような世界にならびない童話作家、世界のちょうこくに一新紀元をかくした芸術家トーワルドセン、天才的なてつ学者キルケゴール、現代言語学の第一人者エスペルゼンなど、たくさんのい大な人を出しています。しかし、この文化国家も農業王国もあの二本の柱が無かったら、きずかれなかったにちがいありません。

（二）風と土にいどむ

「世界でいちばん大きな都のロンドンで食事をすることがあったら、いちばん上等のバターを注文してごらんなさい。きっとデンマーク製のバターがでますから。」

といわれます。それほどデンマークのバターは有名です。そのほか、ベーコンやチーズや牛肉やタマゴなどのちく産品にかけて、デンマークは量の点でも質の点でも世界でもっともすぐれています。バターについてみても、世界のバター貿易全体の三分の一ちかくを、九州ぐらいしかな

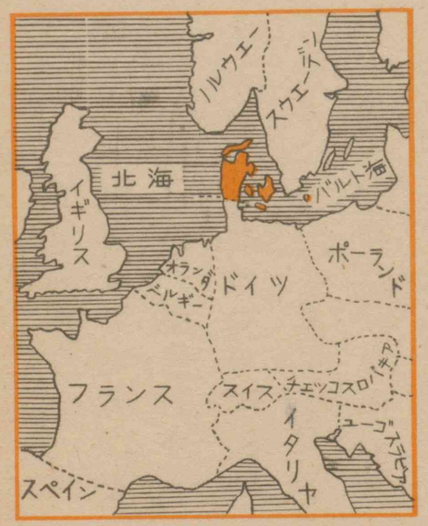
いあの小さな国でしめた年さえあります。このようにデンマークはヨーロッパ第一のちく産国ですが、その気候はちく産にも適しているとはいえないのです。一ばん気候のよい首府のコペンハーゲンあたりでさえ、日光を見る時は一年をつうじて五十日ぐらいに過ぎず、一年のうち四分の一は、こいきりにとざされ、家ちくは九か月の間も小屋の中でかわなければならないというありさまです。それもそのはず、その国土の南のはしが千島列島の北のはしよりも北に当っており、北海の



コペンハーゲン

のつめたくしめった強い北西風が絶えずふきつけ、夏のさなかでも毎夜のようにしもがおりるのでした。何の資げんもない上このような気候風土ですから、全くデンマークは自然からまま子あつかいにされたといってもよい国です。しかも戦争に負けて、いちばんよいところを取られてしまったのですから、国民ががっかりして、何をする元気もなくなってしまったのも、無理がないといえるでしょう。

国民のなかには、国と国との間の関係の複雑なヨーロッパのことだから、イギリスやドイツやロシヤの勢力をうまく利用してうかび



あがることをはかるほうがかしこいと考え、投げやりにその日ぐらしをしていようというものも少なくありませんでした。しかし工兵士官エンリコ・ミリウス・ダルガスは歯をくいしばって、日夜復興の方法を思いめぐらしました。かれの心の中には、敗戦を待たずに、ある計画がうかんでいました。それは、デンマークりょうの半分をしめるユトランド半島の約三分の一が不毛のこう野とぬま地であるのを開たくして、豊かな土地にすることでした。面積四万五千平方キロのデンマークにとって九千平方キロもの広い土地があれるにまかされていたのです。これを生かすことができれば、失ったシュレスウィヒ・ホルシュタインりょうのうめあわせをすることも、こんなんではありません。

海岸に出れば、一年じゅうふきすさぶ北西風のために、すな

が二メートルも積もり、ところどころにある防風林もみな南東にかたむき、かろうじて生存を保っているありさまです。ダルガスはこれに対し、二つの武器をとって立ち、このこう野をせいふくしようと決心しました。二つの武器とは水と木です。水はけの悪いぬまからは悪い水を流しだし、さばくのようなこう地には水を注ぐようにし、ヒースばかりの所にモミのようなよい木を植え、風を防ぎ、温度を調節し、土質を改良しようというのでした。それは決してただの思いつきではなかったのです。

ダルガスは軍人でしたが、無鉄ぽうな思想家ではありません

でした。工兵として戦争に従っている間にも、この地方の地質や地勢を熱心に研究しておきました。彼の計画は愛国的なぼうけんでしたが、科学的な実際的なこんきょを持っていました。それぱかりでなく、古いむかしのいせきを発くつしてみると、この地方にも人々が住み、土地をたがやし、家ちくを養っていたことが確かめられました。ダルガスは確信をもって、ユトランドこう地開たくの計画に人々の協力をもとめました。

しかし、かつてはスウェーデンや北ドイツを治め、ノールウェーをもりょう土にしていたデンマーク人は、むかしの強国時代のぐちをいうだけで、じみな建設に努力しようという気になりませんでした。また、計画はいいが成功するみこみはない。げんに千七百五十九年にドイツ人がユトランドのヒース地帯に

決死的な移民をいれて、はい水、かんがい、客土などあらゆる方法をこうじて、開発をはかったが、さんたんたる失敗に終ったではないか。そういって、ダルガスの計画を非難しました。

しかしダルガスはくっしませんでした。今までは、政治が外にばかり目をつけ、りょう土をひろげることや、取り返すことにしゅうちゃくしてきたため、戦争を重ね、国内の建設はほんとうに考えられなかったのだ。こんなことをくりかえしているのは無意味だ。そういって、力強く人々を説きました。

ようやくダルガスはビタアセン、ドリュウセン、モルビン等の同志を得て、千八百六十六年の三月、デンマークヒース協会を興し、はげしい風とあれた土にいどむ大事業にとりかかりました。

（三）最も悪い日を

「デンマークにとってこんなに悪い時代はない。」と、みんなはなげきました。ダルガスもそれをひていすることはできませんでした。しかし、

「デンマークが立ちなおるのに、こんなよい時はない。」と、かれはかたく信じていました。

もちろん、それをはっきり口に出していうことはできませんでした。そんなことをいえば、戦争に負けたことを喜んでいるうらぎり者とののしられたでしょう。かれはただ実行によって自

分の信念を示すほかはないと思いました。

それでかれは、

「全くデンマークにとって悪い時だ。だが、われわれは、外にうしなったものを内に取り返すことはできる。それはだれにもえんりょはいらないし、だれにもめいわくをかけはしないのだ。われわれの生きている間に、ユトランドの広いこう野と、うるおいのないすな地をバラやサフランの花さく所にしてみせようではないか。」

と説きました。

かれの口調には、予言者めいたところがありました。それも

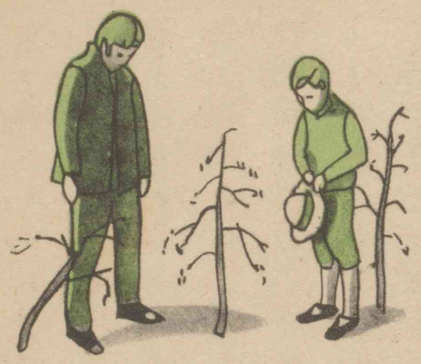
道理、かれの血管には、ねつれつなキリスト教徒の血が流れていたのです。かれの先祖はフランスの新教徒で、新たな信こうの自由を唱えたため、千六百八十五年、フランスを追われ、デンマークににげてきたのでした。それだけにデンマークの土地を楽園にすることに、ダルガスは宗教的な使命を感じていました。この点がかれをして大事業をなさしめた大きな力でした。かれはただの軍人ではなく、土木の実際家であり、地質や植物を根強く研究する科学者でもありましたが、それに宗教的な信念と熱情が加わってはじめて、平和の大業に一身をささげることができたのです。科学と宗教とがりっぱに結びつけるものだということが、ダルガスという人によって、証明されているのは、意義深いことといわなければなりません。

ダルガスは、祖国の復興はまず木からだと思いました。緑の木のしげっている国は、必ず栄え、木のとぼしいはげ山やこう野の国は、必ずおとろえます。いや、木のしげっていることは国の栄えている印であり、木のとぼしいことが国のおとろえている印です。過去、現在を通じて、世界の国々の実例がはっきりその事を示しています。デンマーク自身がそうでした。ユトランド半島のこう野にも、八百年前はりっぱな森がしげっており、二百年前までは所々にかしの林が見られました。ところが、ほう建的な大名たちや、よくの深い、目先の見えない人たちが、さかんに木を切って、もうけることを考え、自然からうばう一方であったため、ユトランド地方は、不毛に近いありさまになってしまったのです。

従って、ダルガスは、他の人々のように、ユトランドを豊かな土地にする事が不可能だと思っていませんでした。自然に対して、うばうばかりでなく、手をつくして報いるところがあれば必ず自然は栄えると信じていました。

まずこう野特有の小さな木ヒースをとりのぞいて、みぞをほり、すな地には水を注ぎ、ぬま地からは水を流し出し、ぬまの水位を整えて、土地を開たくすると同時に、どろばいをやせた土地に移して、土質の改良をはかりました。しつっこいヒースを退治するのは、なかなかほねが折れましたが、これまではさしてこん難ではありませんでした。難事中の難事は植林でした。やせた土地、寒風のふきすさぶすな地に何を植えたらよいか、ダルガスもかねがねいろいろためしてはいましたが、いい答が

出ませんでした。かれより八十年ほど前、デンマーク政府がふつうのデンマークモミを選んで組織的に植林を試みたことがありましたが、がんこな土地はこれを受けつけず、失敗に終ったのでした。多少残っていた木は、はびこるヒースに負けて、次第にかれてしまいました。



ダルガスは研究を重ねた結果、ノールウエー産の赤モミがよいという結論を得て、これを植えてみました。なるほど、これはうまく成長しました。が、どうしたことか、数年たつと、この強い木さえやはりかれてしまいました。

ダルガスは、しかしくじけませんでした。

また初めから研究をやりなおしました。そのうちふと思いうかんだのが、アルプス産の小さい山モミのことでした。これを移植してみたらと考え、さっそく取り寄せて、ノールウェーの赤モミの間に植えてみました。すると、ふしぎなことに、この二つの種類のモミはならんでいたわりあうように成長し、年を経てもかれませんでした。

ダルガスは歓喜しました。緑のユトランドを実現しようというかれの希望はかなえられそうになりました。同時に二百五十万のデンマーク国民もようやく希望を持ちはじめました。今まではダルガスのすることをつめたい目で見、気乗りうすで、植林にも心から協力しなかった人たちも、半分はダルガスに対する尊敬から、半分は欲心から、植林に努力するようになりました。ダルガスもそれを利用し、モミを植えれば早く材木がとれて、とくだからといって、みんなをはげましました。「レバーン（ソロモン王の宮でんの材木を出した山）の栄えはあたえられた」という聖書のことばを力に働いてきたダルガスは心から神に感謝しました。

（四）最も良い日に

しかし、自然はそれほど従順ではありませんでした。

事はそうかん単にうまくはいきませんでした。モミは次々と植えられて、緑の野はひろがっていきましたが、期待したような材木は得られなかったのです。モミはある程度までのびると、そこで成長をやめてしまいました。アルプス産の小モミをなら

べて植えることによってノールウェー産の大きいモミのかれるのを防ぐことはできましたが、すくすくとのびるわけにはいきませんでした。建ちく用の材木が得られることを楽しみにして、植林にはげんだ農民たちは、失望すると同時に、ダルガスにだまされたと思って、ダルガスをなじりました。

「ダルガス、あなたの約束をした材木をくれ。」

と、かれらは口々にいってダルガスにせまりました。ダルガスは苦境に追いこまれました。今日では、農村

の共同組合の発達している点で世界無比なほど協力の精神の強いデンマーク人ですが、そのころはまだ産業組合もたいしてできていなかったので、植林のような共同事業に対する理解はとぼしかったのです。

それに、千八百七十年ごろからヨーロッパの農産物の価格がひどく下って農民は非常に苦しい思いをしました。デンマークをはじめバルチック海や黒海にのぞむ諸国は、こく物を西ヨーロッパに売って、もうけを得ていたのですから、新世界といわれる広く豊かなアメリカやアルゼンチンからたくさんのこく物がヨーロッパにゆ入されてくると、物がありあまり、価格は安くなり、農民の利は全くなくなってしまいました。そのため、デンマークの農民も、苦労して植林したり、開たくしたりして

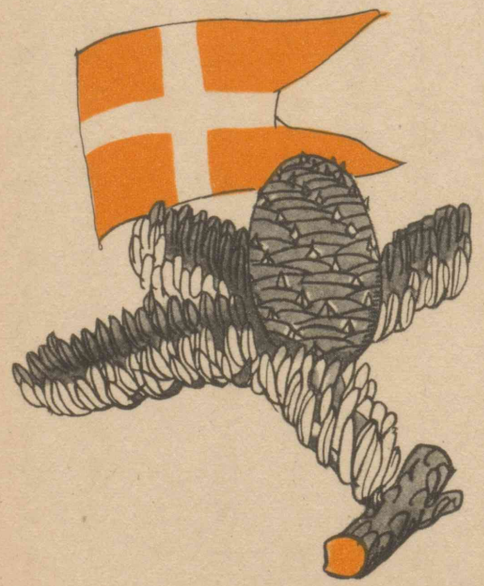
も、かえって作物がたくさんできると、ねだんが安くなってそんをするから、つまらぬ話だといって、ダルガスに協力することをいやがりました。

そこで、ダルガスは国民高等学校の卒業生たちと手をにぎって、農民の利益をまもる共同組合を作ることをすすめ、さらにこく物よりねだんの上っていく速度の早いちく産物へのきりかえをうながすなど、いろいろと手をつくしました。

そのうちにダルガスの長男フレデリックがすばらしいことを発見しました。フレデリックは父の素質を受けついで植物学者の素質にめぐまれていました。わかいダルガスは、大モミがある程度以上に成長しないのは、小モミをいつまでも大モミのそばにはやしておくからであって、もしある時期に小モミを切り

はらってしまえば、大モミが土地をひとりじめにするからどんどんのびるだろう、という結論を得ました。父ダルガスもなるほどと思って、その通りやって経過を見ると、小ダルガスの考えどおりになりました。小モミはある程度までは大モミの成長をうながす働きをしますが、それから後はかえってその成長をさまたげるという原則が確立されました。ダルガス父子の勇気は百倍しました。

これはデンマークの復興にとって、実に大きな発見でありました。古いおとろえたデ



ンマークはわかい科学者によって救われたのです。ユトランドのこう地は、年ごとに青々としげるモミの林におおわれていきました。千八百六十六年にヒース協会のできた時には、ユトランドはヒースのこう地が二千六十五方マイル、ぬま地が二百十五方マイル、すな地が二百方マイルにおよんでいましたが、三十年後の千八百九十六年にはその半分がせいふくされ、ヒース地帯は千二百七十六方マイル、ぬま地は百五十方マイル、すな地は百四十二方マイルにへっていました。反対にまばらな林二百十八方マイルが、七百二方マイルのみつ林にふえていました。そして、その数年後ダルガスが死んだ時には、二千五百方マイルという広い面積がみごとに開たくされていました。

植林の利益は材木が得られるというだけではありません。木

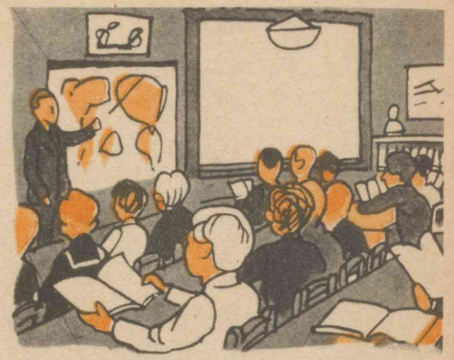
のはえていない土地は熱しやすく、ひえやすいものです。ユトランドもその例にもれず、夏の昼夜の温度がこんなにちがっては、作物のよくできるわけがありません。従って、収かくの見こみのあるのは、ジャガイモ、黒ムギなど小数の作物にすぎませんでした。ところが、植林が成功してから後は、気候がいちじるしくやわらげられ、夏にしもがおりるというような事は無くなりました。そして、ちく産をさかんにするにつれ、それに必要なし料もじゅうぶんにとれるようになりました。

また、モミがしげるようになってから、北の海からふきつける強い風が防がれ、ふき送られてくるすなも海岸だけでくい止められました。モミの木は力強く根をはり、おそってくるすなぼこりに立ち向かい、「ここまではこられるが、ここをこえる

事はできないぞ。」といっているようでした。

その上、雨の多い日本よりずっと雨の多いデンマークのことて、野や畑に水のあふれることがめずらしくありませんでした。もっとも、ユトランドはいちばん高い所でも、海ばつ百五十メートルぐらいですから、日本のようなはげしい出水はありませんが、半島全体の高さが海ばつ三十メートル足らずという低地のため、作物も牧草も水びたしになりがちです。それが植林によって救われたことはいうまでもありません。

こうして、戦争で失ったシュレスウィヒ・ホルシュタインはつぐなわれてあまりあるようになりました。その後デンマークは一



度も戦争に参加せず、ひたすら平和な国内建設につとめた結果、最初にのべたように豊かな、幸福な国家をきずくことができました。この通り、ダルガスの植林は多くの実際の利益をもたらしましたが、それにも増して大きいのは、無形の収かくでした。失望して無気力になっていたデンマーク人が、グルントウィーの教育とダルガスの事業によって希望をあたえられ、活気のある精神をふきこまれたのです。デンマークの土がよみがえっただけでなく、デンマーク人の心が内からよみがえったのです。これより大きなたのもしい力はありません。わが二宮尊徳先生も、田畑をこやすことよりも、人の心をつち

かうことが本来の願いだといい、

「それ、わが道は、人々の心のあれたるを開くを本意とす。あれたる人の心ひとりひらく時は、地のあれたるは何万町ぶあるもうれうるに足らざるがゆえなり。」

と述べています。

グルントウィーの学校と、ダルガスの植林によって、デンマークは、人類社会の二大不幸といわれる無学と貧苦とを無くすことができました。しかも、この二大事業がデンマークのどん底の時代にとりかかられたことは、まことに意義深く感ぜられます。

こうしてダルガスは、自らにちかったとおり、デンマークにとって、最も悪い日を、最も良い日にすることができました。

学習の手引

一　楽しい運動

（一）　私の運動日記

(1)　自分のやっている運動について書いた日記です。毎日どんな運動をしていますか。

(2)　おにごっこはどんなふうにやると、おもしろいと書いてありますか。またみなさんはどんなふうに考えてやっていますか。

(3)　平きん台の練習はどんなふうにやりましたか。

(4)　ドッジボールはどのようにして勝ちましたか。お話してみましょう。

(5)　鉄ぼうは詩のかたちで書いてあります。どこがおもしろいですか。日記の中にこのように詩をいれるのもいいですね。

(6)　八日の山のぼりはだれとだれが行きましたか。ちょう上からながめたけしきをノートに書きだしてごらんなさい。

(7)　みなさんもいろいろな運動をするでしょう。それをこのように日記に書いてみましょう。

（二）　運動会

(1)　楽しい運動会の一日を書いた作文ですね。よく読みかえしてみましょう。

(2)　文の組み立てについて調べてみましょう。
○どんなことから書きだしてありますか。
○文の山はどこにあるでしょうか。
○どんなことばで結んでありますか。

(3)　文の中味について調べてみましょう。

○ここに書いてあるえんぎは何と何ですか。
○どんな気持でそれを書いていますか。
○そのえんぎを、あなたはどう思いますか。
○この運動会の一日を、作者はどんな気持で書き進めていますか。

(4) ことばについて調べてみましょう。
○運動会にかんけいのあることばを書きだしてみましょう。
○そのほかに、あなたの知っていることばがあったら書きだしましょう。
○意味のむずかしいことばを書きぬいて、よくおぼえましょう。
○新出漢字を調べて、その使いかたや、書きかたをおぼえましょう。

(5) あなたの学校の運動会はどうでしたか。
○運動会の作文や詩を書いてみましょう。
○そのほかの運動のことも、作文・日記・詩・かべ新聞などに書いてみましょう。

二　平和と文化

(一) おじさんから

(1) 文を読んで次ぎのことに答えましょう。
○あきらさんの作った「家庭新聞」は、どんな組み立てになっていたでしょう。君たちの「学級新聞」とくらべてみましょう
○新しい憲法はいつ公布されましたか。どういう組み立てになっていますか、また、大もとの考えはどういうことですか。
○文化の日は、どういう祝日ですか。
○湯川博士に、何の研究で、いつノーベル賞を授けると発表されましたか。
○ノーベル賞は、いつごろきめられましたか。いくつの部門に分かれていますか。

○女でこの賞を受けた人はだれですか。

(2) 次ぎのことをくわしく調べましょう。
○憲法　○ノーベル賞
○日本の祝日　○湯川博士
○新聞の作り方　○文化の種類
○手紙の書き方　○学級新聞の作り方

(3) 漢字を使って書きましょう。
○かていしんぶん　○おんがくかい　○としょまつり　○へいわとぶんか　○みんしゅしゅぎ　○ゆかわはくし　○じんるい

(二) 幸福の国の青い鳥

(1) この文を読んで、どういう点を強く感じましたか。

(2) 次ぎのことについて、調べたり、考えたりしてみましょう。
○ヘレン・ケラー先生は、どこの国の、どういう人ですか。
○どんな考えで、どういうことをしていらっしゃる人ですか。
○目も見えず、耳も聞こえない先生に、どうして、世の中のようすや、人の話がわかるのでしょうか。
○東京ろうあ学校の代表の、歓げいのあいさつを読んで、どんな感じがしましたか。

(3) ヘレン・ケラー先生をむかえる歌を、きれいにノートに書き写して、よく読みましょう。曲をつけて歌ってみましょう。

(4) ヘレン・ケラー先生のいい伝記が出ています。この伝記を読んで、先生の苦しい修行時代や、世界平和のためのりっぱな考えなどについて、友だちとよく話しあってみましょう。

(5) 世界の文化のためにつくした、すぐれた人々の伝記を読みましょう。

三　ことばの愛

(一)　ことばの愛

(1) たろうは、とうさんに、どんな質問をしましたか。また、なぜそういう質問をしたのか考えてみましょう。

(2) 遠い国へ行っていたとうさんは、自分の国のことばについて、どんなことを思い、どんなことを知りましたか。

(3) あなたは、この文を読んで、どんなことを思いましたか。かんそうをノートにまとめてみましょう。

(二)　文字の話

(1) アメリカン・インディアンが差出したお願いの文で、どんなことを感じましたか。

(2) 文字のできたのはどんな必要からですか。はじめはどんなものが使われていたのでしょう。

(3) 漢字のできかたのおもなものは、いく種類ありますか。また、それぞれどんな漢字があるか調べてみましょう。

○絵がそのまま字になったものにはどんなものがありますか。

○絵の上へ、さらに別の意味を加えて作った字には、どんなものがありますか。

○そのほかには、どんな方法がありますか。例をあげてごらんなさい。

(4) 漢字の組み立ては、どんなふうに分けることができますか。

(5) 字引をひく時、わすれてならないことはどんなことですか。

(6) 仮名はどうしてできましたか。

(7) ローマ字はどうしてできましたか。

四　工夫の楽しみ

(一)　こわれたポータブル

(1)「こわれたポータブル」の文を読んで、ひろすけが、どのようにしてポータブルをなおしたかをしらべましょう。

(2) ひろすけが、いままでに作ったものにはどんなものがありますか。この研究や製作ぶりについて、どう思いますか。

(3) 文やさし絵をしらべ、ポータブルの機械を参考にして、次ぎの問題に答えなさい。

○ひろすけは、どうしてこわれたポータブルをなおすようになったのですか。

○このポータブルのこわれたもとはどこだったのですか。

○ポータブルをうまくなおした時の、ひろすけの心持はどうだったでしょう。

(4) 次ぎの漢字に読みがなをつけなさい。

写真機　望遠鏡　製作　専門家

書類　報告　分解　金属　金具

(5) みなさんも、自分で工夫したことや研究したことを文に書いてみましょう。

(二)　スイスのとけい

(1) 長いお話です。お話のすじをつかむように読みの練習をしましょう。

(2) 地図や年表を使って、次ぎのことを調べてみましょう。

○スイスは、ヨーロッパしゅうのどのへんにある国ですか。

○どんなことで名高い国ですか。

○このお話のおこりは、今から何年ぐらい

むかしのことですか。

(3) 外国から帰ってきたエアンと村人について、どんなことを感じましたか。

(4) リハルトについて、次ぎのことに答えなさい。

○少年時代のリハルトは、どんな子どもだったと思いますか。

○リハルトは、とけいを作るためにどんな苦心をしましたか。

○ユーラの村には、こがね、白がねの花がまばゆくさいたとありますが、それはなんの結果ですか。

(5) この文を読んだかんそうを書きましょう。

五　冬の生活

(一) スキーの話

(1) スキーの話を読んでわかったことがらをノートに書きだしなさい。

(2) スダルスキーについて、次ぎの問題に答えなさい。

○どこの人ですか。

○どんなことからスキーに興味を持つようになりましたか。

○はじめて手に入れたスキーはどんなものでしたか。

○そのスキーを、どのように改良しましたか。

(3) 日本に伝わったスキーについて、次ぎの問題に答えなさい。

○それはいつごろのことですか。

○だれから送られてきましたか。

○日本のどこで研究することになりましたか。なぜ、そこにきめたのでしょうか。

○その時の先生はだれですか。

(4) これはスキーのれきしについて調べた文です。このほかスキーについていろいろなことを調べてみましょう。

(二) 雪のえい画

(1) 「雪国」のえい画は、どんなすじであったか、みじかくまとめてお話しましょう。

(2) 「雪国」のえい画を見て、この作者はどんなことを感じましたか。

(3) 「雪国」のえい画を、もっとおもしろくするためには、どんな場面をとったらよいといっていますか。それをシナリオに書きかえてみましょう。

(4) 読む人の心をひく文章は、どんなことに注意して書かれたものでしょう。あなたもいろいろなかんそう文を書いてごらんなさい。

六　デンマークの二本の柱

(1) 全文を読みとおして、その感そうをノートに書いてください。またそれをみんなで話し合ってください。

(2) この話の中で、一ばん心をうたれたところはどこですか。そこをノートに書きぬいて、発表してください。

(3) この話を、できるだけみじかくまとめてごらんなさい。

(4) (一)「二本の柱」をくわしく読んで、次ぎの問題に答えてください。

○戦に敗れたデンマークを復興させるために、ダルガスの考えたことはどんなことでしたか。そしてまず何をしましたか。

○グルントウィーの考えは、どうでしたか。

かれは何をしましたか。

○ダルガスとグルントウィーを、なぜ、二本の柱といったのでしょうか。

○戦に敗れた当時と、今のデンマークはどのようにちがっていますか。それは、だれの力だったのですか。

(5) (二)「風と土にいどむ」をくわしく読んで、次ぎの問題に答えなさい。

○ダルガスの考えた計画はどんなことですか。それをどう思いますか。

○どのような考えからこれを思いついたのでしょうか。

○それに対して、人々はどういうたいどをとりましたか。

(6) (三)「最も悪い日」を読んで、ダルガスの苦心した点について話し合ってください。

(7) (四)「最もよい日に」の中にでてくるフレデリックはどんな人ですか。かれはどんな発見をしましたか。

(8) ダルガスのやった植林の利益について、あげてください。

(9) デンマークの二本の柱のように、人類のためにつくした人々について調べてみましょう。

(10) 次ぎのことばの意味を書きなさい。

○一新紀元　○複雑　○不毛のこう地

○防風林　○む想家　○予言者

新しく出たおもなことば

愛国的な	126	一敗	118	えいゆう	91
アメリカ合しゅう国	33	いっかな	84	H停留場	36
アメリカン・インディアン	52	いどみかかっ(た)	118	絵日がさ	19
アルプス山中	79	移民	127	絵文字	54
あれたる	144	以来	96	えんぎ	15
息切れ	12	うかがう	47	演だん	46
意義深い	130	動かばこそ	84	円板	75
移植	134	うながす	138	おうえん	15
いたわりあう	134	うらぎり者	128	横断	99
一見	115	うるおい	129	おごそか(な)	79
一新紀元	120	うれうる	144	おそっ(て)	141
一首	107	えい画的手法	105	おとろえ(ます)	131
一せいに	16	えい画化する	108	思いめぐらし	124
一定し(て)	55	えい久に	32	折紙	34

カーブ	27	改良し(て)	91	価格	137
かい書	61	外野	10	かがやかしい	48
階上	38	外務者	102	化学	34
開たく	117	科学的	31	限りなく	96
開発	127	回転	75		

かくし(た) 120
確信 126
角度から 107
学年代表選手 26
確立 139
過去 131
歌詞 42
活気 143
かつて 126
家庭新聞 30
かねがね 132
カモシカ 53
歓喜 134
歓声 15
完全に 26
感情 48

かんがい 127
議会 52
気候風土 113
記号 48
期待した 135
気乗りうす 134
客土 127
宮でん 135
急しゃ面 101
旧紀聖書 119
興味 100
協力 126
協会 127
共同事業 137
教養 116
キリスト教徒 130

気力 113
金属 73
近代産業 112
銀世界 80
くいしばって 16
苦境 136
くじけ(ません) 133
口調 129
くっし(ません) 127
グリーンランド 99
くん音 60
芸術家 120
決意し(て) 114
血管 32
決死的な 28
決勝点 31

結論 133
けわしく 12
健康 15
憲法 32
権利 52
建ちく用 136
建設 126
現代言語学 120
原則 139
コイルまき 65
講演会 31
幸福 28
公布され(た) 32
光線 49
こう地 117
こうじ(て) 127

合同し(て) 52
合同体そう 15
号令 15
こえ(た) 118
こがね 96
国産の 113
国土改良 116
こごえ死に 108
試みた 133
コペンハーゲン 122
こんきょ 126
差 9
細工物 81
サウンドボックス 73
さえぎ(られ) 81
さして 132

授ける 33
さなか 123
サフラン 96
さまたげる 139
参加 143
産業組合 137
さんたんたる 127
残暑 39
祝日 32
資げん 123
自作し(て) 66
自信 90
自身 131
実行され(た) 119
実現 134
実例 131

実際実 130
しのぎがたい 80
四方八方へ 5
使命 130
しめ具 101
社説 31
宗教家 115
集合し(て) 14
しゅうちゃくし(て) 127
首府 122
しゅみ 83
従順 135
しゅん間 27
準備運動 20
女史 35
しょうかい 98

植物学者 138
証明され(て) 130
しょげきっ(て) 85
諸国 137
し料 141
しるべに 109
白がね 96
進歩 34
新教徒 130
信こう 130
進行がかり 15
真理 41
しん動 40
信念 129
しんにゅう 57
人物 115

人類社会 144
入口 120
スイス 79
水位 132
水じゅん 34
水力電気 112
スタートライン 16
生存 125
せいふく 125
勢力 123
世界無比 137
線画 55
先祖 130
前庭 15
前文 32
専門家 66

草書 61
総立ち 23
続々と 23
祖国 115
組織的に 133
素質 138
尊敬 91
第一人者 120
大詩人 116
台地 79
大業 130
大接戦 27
大名 131
だげき 113
他国 81
立ち往生 108

タブー 53
保っ(て) 125
たん検家 99
たんねんに 107
ちかっ(た) 144
ちく産品 121
地質 126
千島列島 122
地勢 126
ちみつ 81
注目 53
ちょうこく 120
調子づい(て) 68
調節 125
通訳 47
つぐなわれ(て) 142

つちかう 143
つつましい 107
つづらおり 79
つのっ(て) 23
定こく 39
手製 92
てつ学者 120
鉄こう 112
テン 53
天才 95
点じる 48
電ちく 68
デンマーク 112
ドイツ 118
童話作家 120
堂々と 41

同志 114
徒競走 16
特有の 132
ドッジボール 8
唱えた 130
土木事業 116
とぼしい 131
とりあい(ません) 86
努力 47
どん底 113
内野 9
投げやりに 124
なしとげ(られた) 115
なじみの 120
なじり(ました) 136
名だたる 115

難事中の 132
にいがた県 103
にぎわい(ました) 20
日夜 124
入用な 90
人魚 53
ぬま地 124
音色 40
熱情 130
熱戦ぶり 23
根強く 130
ねつれつな 130
年代 61
ノーベル物理学賞 33
農業王国 120
農民 116

ののしられ(た) 128
はい水 127
敗戦 115
売店 20
はかどら(せた) 117
白金 96
ばく発し(た) 27
歯車 72
発くつし(て) 126
バトン 27
はなばなしく 31
バルチック海 137
反しゃする 67
半世紀 33
ハンドバック 25
ヒース地帯 140

ひかえ席 15
ひけつ 93
日ざし 13
美術展らん会 31
ひた向きに 6
ひていする 128
日どけい 88
非難 127
びみょうな 40
悲鳴 75
貧苦 144
ピンク色 36
フィンランド 99
不可能 132
武器 32
ふきすさぶ 124

複雑 123
副食物 20
ふち 114
不毛 114
部門 34
ブラシ 75
フラッシュ 49
分解し(て) 71
ふん水 18
ふんだんに 107
平きん台 6
平方キロ 124
ベーコン 121
経る 54
変圧器 65
放しゃ線 66

貿易総額 120
望遠鏡 65
ほう台 119
ほう建的な 131
防風林 114
ポータブル 64
報告 69
牧草 142
北氷洋 99
本意 144
本場 92
本来の 144
まことしやかな 91
学ば(ざるべし) 119
まま子あつかい 123
満場 39

自ら 118
みつ林 140
民主主義 32
無学 144
無形の 143
むざむざ 93
無人島 99
む想家 125
メガホン 74
めぐまれ(て) 112
面積 124
もう人たち 39
モミ 125
門がまえ 57
やせ(た) 114
やわらげ(られ) 141

湯川りゅうし 33
有志 23
要具 97
要点 30
欲心 134
予言者めい(た) 129
よみがえっ(た) 143
利益 138
理解され 115
理論 33
るつぼ 26
歴史 113
レコード音楽 14
ろうあ学校 46
わけても 30
ワンピース 36

新しく出た漢字

相(5)
談(5)
守り(5)
差(9)
得(10)
浮かぶ(14)
席(14)
歓(15)
令(15)

歯(16)
軍(18)
給(20)
副(20)
奮(20)
総(23)
取り(27)
味(27)
敵(27)

要(30)
布(32)
憲(32)
武(32)
士(33)
賞(33)
紀(33)
史(35)
堂(36)

演(36)
留(36)
詞(42)
届き(47)
努(47)
訳(47)
情(48)
浴びて(49)
筆(51)

暮し(51)
権(52)
印(53)
漢(54)
仮(54)
劣る(56)
圧(65)
鏡(65)
専(66)

徳(69)
報(69)
告(69)
解(71)
付け(72)
属(73)
久しい(81)
他(86)
敬(91)

改(91)　良(91)　造(92)　限り(96)　達(99)　央(99)　険(99)　脈(100)　各(102)

式(102)　導(103)　序(104)　量(105)　確かに(106)　往(108)　栄える(112)　欠けて(112)　候(113)

歴(113)　敗(113)　宗(115)　祖(115)　難(116)　剣(117)　旧(119)　聖(119)　貿(120)

易(120)　額(120)　肉(121)　適(122)　府(122)　資(123)　複(123)　雑(123)　生存(125)

保って(125)　節(125)　協(126)　建(126)　帯(126)　非(127)　証(130)　必ず(131)　在(131)

可(132)　能(132)　退(132)　政(133)　織(133)　欲(134)　程(135)　束(136)　比(137)

価(137)　諸(137)　益(138)　素(138)　則(139)　救われ(140)　牧(142)　述べて(144)

編修委員

日本女子大学付属豐明小学校主事　西原慶一
東京学芸大学竹早付属小学校教諭　泉節二
同　山下正雄
成蹊中学校教諭　飛田多喜雄
日本女子大学付属豐明小学校教諭　小山玄夫
作家　斎田喬

さし絵・表紙

高橋庸男　西村保史郎
三芳悌吉　三輪孝

Approved by Ministry of Education (Date Oct. 26,1950)

国語の本十（小学校第五学年後期用）

昭和二十六年五月十日印刷
昭和二十六年五月十五日発行
（昭和二十五年八月十二日文部省検定済）

12 二葉　小国535

定価　円　銭

著作者　代表者　西原慶一
発行者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔
印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔
発行所　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社

なまえ

広島大学図書
0130449915

二葉株式会社